石　神　遺　跡

発　掘　調　査　報　告　書

宮崎市文化財調査報告書

第　1　集

1 9 7 3

宮　崎　市　教　育　委　員　会

「P16の遺物」にナンバーが付いていない為、こちらで認意にa～kの記号を付けいる。

はじめに

近年における道路築造、宅地造成工場等の開発事業の波は、遂に本市にも波及し、その規模も次第に大型化され、自然破壊の行為が大きい力をもって進められるようになり、記念物や埋蔵文化財包蔵地も破壊の危機にさらされている現状で、何等かの法的な強い措置が望まれているところです。

本市には、縄文時代から弥生、古墳時代にかけての遺跡が数多く散在しており、特に本市の東部海岸に近い砂丘地などには、弥生時代の土器片が多く見られますが、最近この地域にも住宅化が進み開発行為が進められていくことが予測されるので、前に運送会社の車庫建設で発見されていた石神遺跡について、しっかりした資料をつかむため、更に範囲を広げ、開発に先手をうって本調査を実施したわけです。

調査は真夏の熱い時期に行われたので調査員の方々には大変ご苦労であったと思いますが、大宮中学校、檍中学校の文化財愛護少年団等の協力を得まして調査も予定通り終了しましたこと、ここに感謝申し上げる次第です。

本遺跡の調査は緊急調査、予備調査、本調査と3度にわたって実施いたしましたが、さきに発刊いたしました概報に引き続き今回総まとめとして本調査報告書を発刊することにしました関係各位の参考となれば幸いです。

昭和48年3月31日

宮崎市教育委員会

例　　言

1、 本書は、宮崎市教育委員会が、昭和46年7月22日から7月31日まで実施した山崎町石神遺跡発掘調査の報告書である。

2、 昭和45年7月の緊急調査、昭和45年12月の予備調査については、「宮崎市文化財調査報告書ー石神弥生遺跡調査概報」（昭和46年3月刊）を参照。

3、 本文の執筆者の氏名は目次に明記した。

4、 原稿執筆の段階で十分な討論をもつ時間がなく、用語の統一を欠いた点がある。

5、 挿図の作成は安楽勉があたり、写真撮映には野間重孝があたった。

6、 本書の編集は鈴木重治と野間重孝があたった。

7、 本調査に於ける出土遺物は、宮崎市教育委員会に保管している。

昭和48年3月

宮崎市教育委員会

本文目次

第1章　調査の経過と調査団の組織……（野間重孝）1
第2章　遺跡周辺の研究概史……（石川恒太郎）3
第3章　遺　跡……5
　第1節　遺跡の立地と周辺の遺跡……（鈴木重治）5
　第2節　包含層の状態と出土状況……（　〃　）11
第4章　遺　物……15
　第1節　土　器……（鈴木重治）15
　第2節　石　器……（安楽　勉）19
　第3節　軽石製品および土製品……（安楽　勉）23
第5章　考　察……25
　第1節　宮崎における弥生文化の編年上の位置……（鈴木重治）25
　第2節　遺物、遺構を通じての2、3の問題……（鈴木重治）28

挿　図　目　次

第 1 図　宮崎市内の主要遺跡の分布図……6
第 2 図　宮崎市山崎町石神遺跡地形図……8
第 3 図　各地区土層図……10
第 4 図　B地点　壺棺周辺の出土状況……11
第 5 図　B地点　遺物出土状況……12
第 6 図　B地点　土器出土状況……13
第 7 図　B地点　甕棺出土状況……14
第 8 図　出土土器実測図……16
第 9 図　出土土器実測図……18
第 10 図　軽石製品実測図……20
第 11 図　石器実測図……20
第 12 図　大型砥石実測図……22
第 13 図　軽石製器台実測図……22
第 14 図　土製品実測図……24

図　版　目　次

図 版 1　(1) A地点発掘状況　(2) B地点発掘状況
図 版 2　(1) 遺跡遠景　(2) 堆積状況
図 版 3　(1) B地点壺棺周辺の出土状況　(2) 遺物の出土状況
図 版 4　(1) 壺棺出土状況　(2) 軽石製品出土状況
図 版 5　(1) (2) 壺形土器
図 版 6　(1) (2) 甕形土器
図 版 7　(1) 壺棺　(2) 土製勾玉　(3) (4) (5) (6) 軽石製品　(7) 紡錘車
図 版 8　(1) (2) (4) (5) 石鏃　(3) (6) 小型ノミ型石器　(7) 中型砥石
(8) 小型砥石　(9) 凹石　(10) 大型砥石

第 1 章　調査の経過と調査団の組織

1、緊急調査

昭和45年7月、山崎町の県道、島之内、一の宮線に面した下原において、扇興運輸の事務所及び車庫造成中に、土器片が多数露出しているのをたまたま、現場を通りかかられた南九州大学助教授、鈴木重治氏によって発見され、市教育委員会に報告が成された。市教育委員会は、県教育委員会と協議のうえ、扇興運輸に2日間程、工事の延期を求め、快諾を得たので7月8、9日に緊急調査を実施した。

調査では、四基の甕棺、坩、その他、弥生中期の土器片及びヤリガンナの穂先と思われる鉄器を発見している。

2、予備調査

緊急調査の結果、遺跡の範囲は、扇興運輸の敷地のみではなく、隣接の土地にも及ぶことが明らかになった。ところが近時、住吉の日向灘沿いにフエニックス動物園、ゴルフ場、ホテル等の建設が進められており、遺跡の立地する砂丘上には、県道、島之内、一の宮線が走っているため、前記の観光施設が建設されると、この道路が主要交通路になり、遺跡保存へ危機をおよぼすことは必至である。そこで、市教育委員会では、事前に学術調査を計画し、その予備調査として、昭和45年12月25日～28日までの3日間、これを行った。

調査は、扇興運輸事務所の北隣りの荒地に東西20m、南北20m4方の調査区域を設定し、東西4mごとにA、B、C、D、E、南北4mごとに1、2、3、4、5とし、4m 4方のグリッドを組み、本調査にそなえて自由にトレンチを延長できるようにした。

予備調査では、E区を60m北側に延長して、2m×2mのトレンチを6個所に入れて遺跡の広がりを調査した。

3、本調査

予備調査でE－4区において住居址と思われる遺構の発見、遺物包含層の確認、遺跡の広がり等の確認により、この遺跡は、宮崎県においても有数の弥生遺跡であることがわかり、昭和46年7月22日～31日迄の10日間に学術調査を実施した。

本調査では、予備調査で設定したグリッドにおいて、調査を進めることにしたが、砂丘が東から西に傾斜しており、A区、B区においては、表土から包含層までが薄く、すでに耕作によって、攪乱されており、D区、E区の包含層の方がしっかりしていることから、本調査では、D区、E区に集中することになった。

調査は、予備調査においてE－4区のD区よりに2m4方のトレンチに住居址と思われるものを確認していたため、本調査において、この遺構を明らかにするべくE区を中心に行い、順次D区の方にトレ

ンチを拡長していった。D区、E区の全区画発掘と一部、E－3区、E－4区において1m程西側に拡長した。

また、7月27日からは、弥生時代の水田遺構確認のため、遺跡の西側に広がる水田に1m×20mのトレンチを組み、4mおきの3区画を発掘調査した。

石神遺跡の調査については、調査員の他に7月の炎天下の中、大宮中学校文化財愛護少年団（顧門、金丸陽一教諭）、檍中学校文化財愛護少年団（顧門、雲山博教諭）、また市教育委員会は、こうした埋蔵文化財発掘調査参加にとぼしい学校の先生方に発掘調査の実務と研修を呼びかけたところ、多数の先生方の参加を得たこと、それに宮崎県出身で福岡市教育委員会、文化課勤務の柳田純孝、二宮忠司、横山邦継氏が仕事の余暇をみて、わざわざ福岡よりかけつけての応援をいただくなどして、調査はよりよき成果をあげて終了した。

4、調査団の組織

調査主体　宮崎市教育委員会
調査員　石川恒太郎（文化財専門委員）
　　鈴木重治（南九州大学助教授）
　　安楽勉（宮崎高等学校教諭）
調査補助員　沢皇臣（福岡市文化課調査員）
　　川信修治（南九州大学生）
　　山崎睦男（　〃　）
　　原田由美（南九州短期大学生）
　　児玉育子（　〃　）
事務局　宮崎市教育委員会社会教育課
　　課長　曽根敏陽
　　補佐　小田実
　　主事補　野間重孝（発掘現場担当）

2章　遺跡周辺の研究概史

宮崎市石神遺跡の周辺の市内檍地区は、大淀川北岸の海岸地帯で、ほとんど砂丘より成るところである。遺跡の北方なる産母（やぼ）に鎮座される江田神社は伊弉諾、伊弉冊の二神を祀る古社で、承和4年（837）8月官社に列し、（続日本後紀）天安2年（858）10月従4位上に叙せられた（日本三代実録）式内社である。この地は伊弉諾尊が夜見国より帰って禊祓いをされたいわゆる「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐ケ原」の伝説地であり、その故にこの神社が建立されたわけである。

この檍地区の砂丘には弥生時代の石器や土器その他の遺物や遺跡が広く包含されて居り古墳もあるが、それらの遺跡の調査研究の歴史はあまり古くはない。宮崎県の史蹟調査員であった谷口炭山氏が、市立檍中学校南側の前方後円墳を大正時代に発掘調査したという人もあるが、谷口氏の報告書もないし、事実かどうかも疑がわれる。この地方の遺跡が学者の注目をひいたのは昭和26年と27年の2回にわたって市立檍中学校々庭から甕棺が2個発見されてからであった。この甕棺は一個は単甕で一個は合口甕棺であったが、単甕のものは高さ58cmの壺形のもので、合口のものは、下の甕は高さ35cm、その上に浅い鉢形の蓋をしたものであった。何れも人骨はすでに消滅しており、小児用の甕棺であったことが知られた。

ついで昭和29年秋には檍中学校正門の道路を隔てた北側にあった同校の甘藷畑から生徒の甘藷掘取作業中に鉄製の石庖丁形のものが発見されたが、ほぼ同形のものを福岡県の福岡高等学校教諭森貞次郎氏が所蔵されており、それが中国の鉄製庖丁に類似することから、中国式の鉄庖丁として重要文化財に指定されていた。従ってこの品も重要文化財に指定される可能性があるものとして学界の注目を浴びた。私は昭和29年に日本考古学協会々員に推薦されたので同年秋京都大学で開催された同協会の大会に出席したところがこの鉄庖丁の拓影が展示されていたのを見て驚ろいたのであったが、当時宮崎市に滞在して各地の調査をしておられた同協会々員原田大六氏がまたは同協会の委嘱によってここの遺跡を調査しておられた森貞次郎氏かによってこの拓影が提出されたものであろうと思ったのであった。しかしこの物は森氏所蔵のものが喪失された後近代の耕耘機の歯であるということで、原田大六、森貞次郎両氏の名によって学界から資料として撤去された。学界への提供者によって撤去されたのであるから、当然の処置と思うのであるが、ただ二人の人によってこのような重要な資料が学界に弄ばれたことについては誠に遺憾に考える次第である。

ついで同31年には同中学校生徒によって同校の側らの前方後円墳の北方にあった畑から古式の曲玉一個が発見された。この曲玉は硬玉製で両面を扁平にし、円形の中を刳って、その一方より孔を穿った珍らしいものであった。

さらに同年2月の強風によって、校庭東部に一段高く設けられていたバレーボールの運動場の土が西風に吹き払われた跡に土器が現われたという報告が県教育庁社会教育課にもたらされたので、寺原俊文主事とともに現場に行き調査したところが、土器は甚だしく風化した海蝕岩を敷いた石畳の間に入って三個発見された。そしてこれらのうち2個は弥生前期の板付式土器に属するものであった。それでその附近を調査してさらに一ケ所の敷石のあるところを発見した。

ところがこの年の8月福岡高校生徒2名を連れて森氏はまたもここの遺跡調査に来られ、同校の小使

室に宿泊して発掘調査を行われたが私も立会を求められたので調査に立会った。この調査で森氏は、私たちが最初に発見した敷石遺跡から1個の小さい壺形土器を発掘されたが、この土器も板付式で、腹部に綾杉文を帯状にめぐらしていたように気憶している。また第一号敷石の東方に長さ10米、幅1米のトレンチを東西に入れて発掘した結果、その東端から合口甕棺一基を発見されたが、この甕棺は下甕は板付式の甕で、上甕は朝顔形口縁を有する甕の口縁部を打ち欠いで、首部以下を下甕に冠せたものであった。これらの遺物は森氏が持ち帰られたのである。

このような状態で、ここを発掘すればさらに遺跡や遺物が見出だされる状況であったし森氏も汽車の切符が時間切れとなる関係から後の調査を私に依頼して帰られた関係もあったので、県教育庁教育課と打合せた結果宮崎考古学会々員および檍中学校職員、宮崎市教育委員会職員、市内中学校社会科担当教員らの参加で同校々庭を発掘調査を行なった結果、敷石を有する家屋と思われるもの三個そのほか土器等を発掘して、その経過を「宮崎県文化財調査報告書」(第4号)にて「宮崎市檍弥生初期集落遺跡」と題して発表した。

私は昭和28年に延岡市から宮崎市に転住して以来、この遺跡の重要性を認識し、閑あるごとに自転車で石神周辺を巡り、石器や土器片を表面採集して調査し、域る時は当時宮大の学生だった茂山護君とともに調査したこともあった。そしてこの遺跡を中心とする周辺の概要を「宮崎市阿波岐原町砂丘遺跡」と題して昭和33年発行の「考古学雑誌」第43巻第4号に発表した。この報告で石神遺跡は、現在の一ツ葉入江の東方の砂丘を加えて第二砂丘に位置し大島から檍中学校に至る砂丘が第一砂丘であることを明らかにしたのである。

ついで昭和34年ごろ故松尾宇一氏らの依頼で石神遺跡の一部の発掘調査を行ない、大形の甕棺一基のほぼ完形に近いものと、石戈1個その他を発掘したが、甕棺は県立博物館で復原され、石戈とともに所蔵されている。

その後昭和35年ごろ檍中学校の北方の字浮之城で、墓地の造成中に弥生中期の甕形土器のほぼ完全なものが1個掘り出されて市役所に届けられたが、朝顔形口縁の大きい土器で口径50㎝内外のものであった。有馬美利市長の時で、私が復原して市長室に置かれていた。有馬市長は檍遺跡に対し、非常な関心を示し、これが保存について上京の途、東京大学生産技術研究に居られた工学博士関野克氏を訪れて保存対策を相談されたほどであったが、その後この遺跡は前記森貞次郎氏の調査によって破壊されて消滅し、現在は砂丘の一部を残すのみとなった。

またそのころ遺跡の西方の第一砂丘にある市立大島小学校の改築の際、同校敷地から小児用の甕棺が一基発掘されたが、これは甕の蓋を石でしたもので、土地の人によって宮崎大学に届けられた。同じころその北方の字村角で、砂取工事を行なっていた村田某というトラックの運転手が砂丘から甲冑一着を発見して私の家に鑑定を求めて持参した。この運転手は面識のあるものであったが、兜は眉庇付のもので、鎧は挂甲で、肩袖付の珍らしいもので私の家に暫時預かり、修理をなし「宮崎県文化財調査報告」(第6輯)に報告したが、遺物は本人が引取りに来たのでこれを返した。

その後昭和45年7月6日に南九州短大助教授の鈴木重治氏が、石神遺跡附近を通行中に道路に夥だしい土器が掘り出されているのを発見して宮崎市教育委員会に報告されたことから、市教育委員会は県教育委員会に報告して協議した結果、県市教委合同で同年7月8、9両日緊急調査を行ない甕棺その他を

発掘したが、近来同地方の開発が急速に行われつつあり、これによりこの遺跡も破壊に瀕していることから市教育委員会では遺跡を守るため事前に学術調査を行うことの必要を感じ昭和45年12月25日から3日間予備調査を行ない、昭和46年に本調査を行なったのである。

第3章　遺　跡

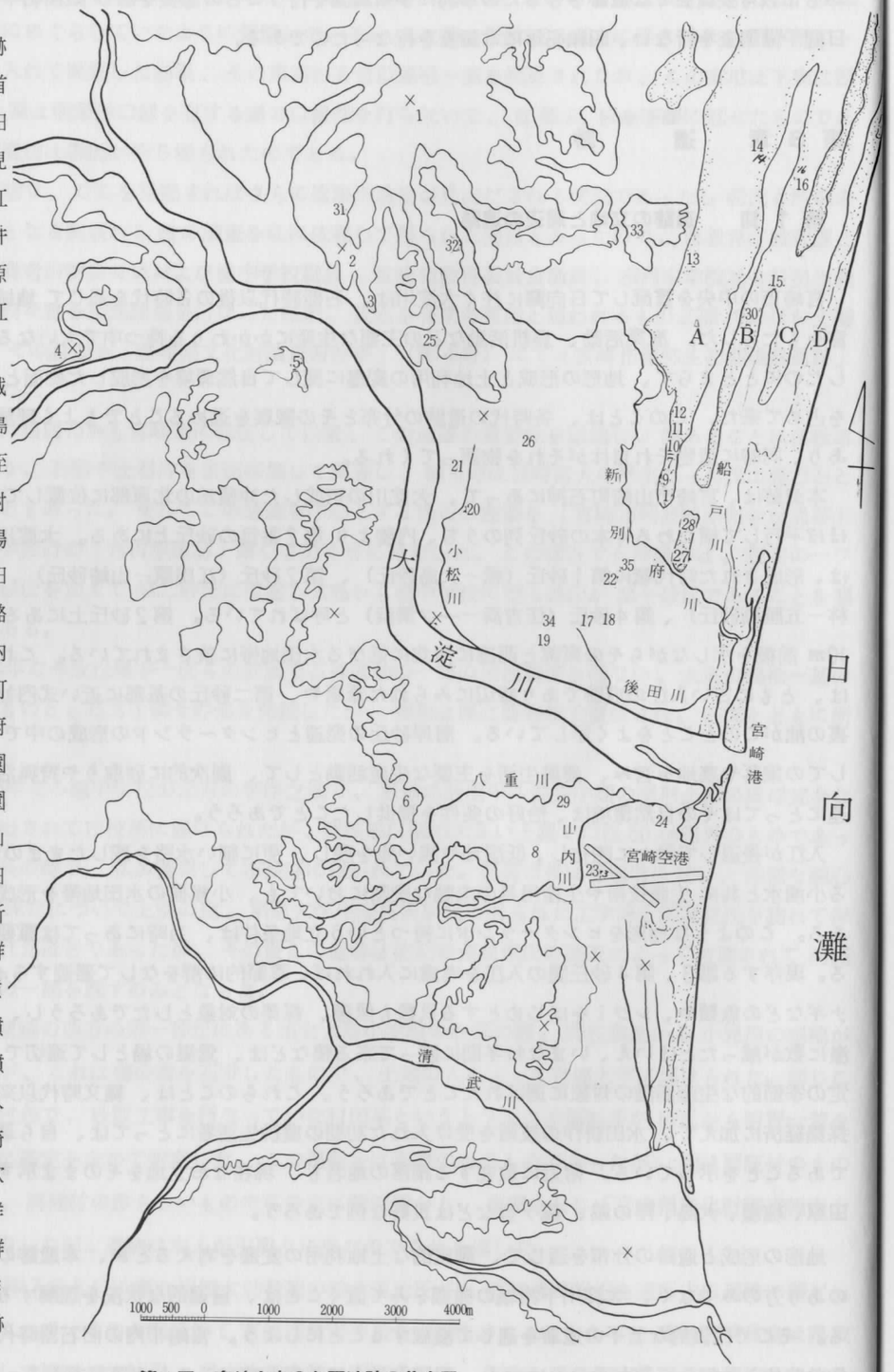
第1節　遺跡の立地と周辺の遺跡

宮崎市の中央を貫流して日向灘に注ぐ大淀川は、石器時代以後の各時代を通じて地域の住民に大きな富をもたらした。漁業活動、農耕活動などの主要な生産にかかわりを持つ中で大いなる生活資料を提供したのにとどまらず、地形の形成と土地利用の変遷に関して自然環境を形成した側面として重要な位置を占めて来た。このことは、各時代の遺跡の分布とその観察を進めることでもよく理解されるところであり、同時に遺物それ自体がそれを物語ってくれる。

本遺跡は、宮崎市山崎町石神にあって、大淀川の形成した沖積地の北東部に位置して居り、海岸線にほぼ平行して横たわる4本の砂丘列のうち、内陸より第2番目の砂丘上にある。大淀川左岸の砂丘列は、形成された時代順に第1砂丘(檍—大島砂丘)、第2砂丘(江田原—山崎砂丘)、第3砂丘(防潮林—五厘橋砂丘)、第4砂丘(住吉浜—一ツ葉浜)と呼ばれている。第2砂丘上にある本遺跡は、標高10m前後を示しながらその東部と西部に南北に延びる水田地帯に狭さまれている。これらの水田地帯は、ともに古い入江の痕跡であり縁辺にみられた葦原や、第二砂丘の基部に近い式内社である江田神社裏の池がこのとことをよく示している。海岸砂丘の発達とヒンターランドの形成の中で、生活の本拠としての集落や墓地を営み、農耕生活を主要な生産活動として、副次的に砂取りや狩猟活動に従事した人達にとってはその自然環境は、恰好の条件を提供したことであろう。

入江が後退して除々に陸化し、低湿地や浅い池を残し、更に細い水路を残したままの葦原は、散在する小湧水と共に生産技術や生産用具の未熟な段階においても、小規模の水田地帯を形成するのに好適である。このような地形をヒンターランドに持つという立地条件は、当時にあっては重要な意味を有する。現存する第3、第4砂丘間の入江を考慮に入れれば、季節的に群をなして廻遊するボラ、チヌ、ウナギなどの魚類や、シジミをはじめとする貝類も保獲、採集の対象としたであろうし、最近に至って急激に数が減ったとはいえ、いまなお冬期に渡って来る鴨などは、鶯巣の場として適切であるだけに、特定の季節的な生産活動の対象に選ばれたことであろう。これらのことは、縄文時代以来の伝統的な狩猟採集経済に加えて、水田耕作の技術を受け入れた初期の農耕生活者にとっては、自ら選択した生活立地であることを示している。附近に散在する集落の地名も、現在なお立地をそのまま示すものであり、江田原、塩屋、大島、浮の城、鷹ケ音などは良好な例であろう。

地形の形成と遺跡の分布を通じて、歴史的な土地利用の変遷を考えるとき、本遺跡の乗る第2砂丘上のあり方のみでなく、大淀川下流域の様態をみて置くことは、普遍的な状況を理解する上で有効である。そこで代表的な若干の遺跡を通じて概観することにしよう。宮崎市内の旧石器時代遺跡の分布は、他の時代と比較して数が少いとはいえ、洪積台地上に位置していることは確実である。沖積地での採集



第1図　宮崎市内の主要遺跡の分布図

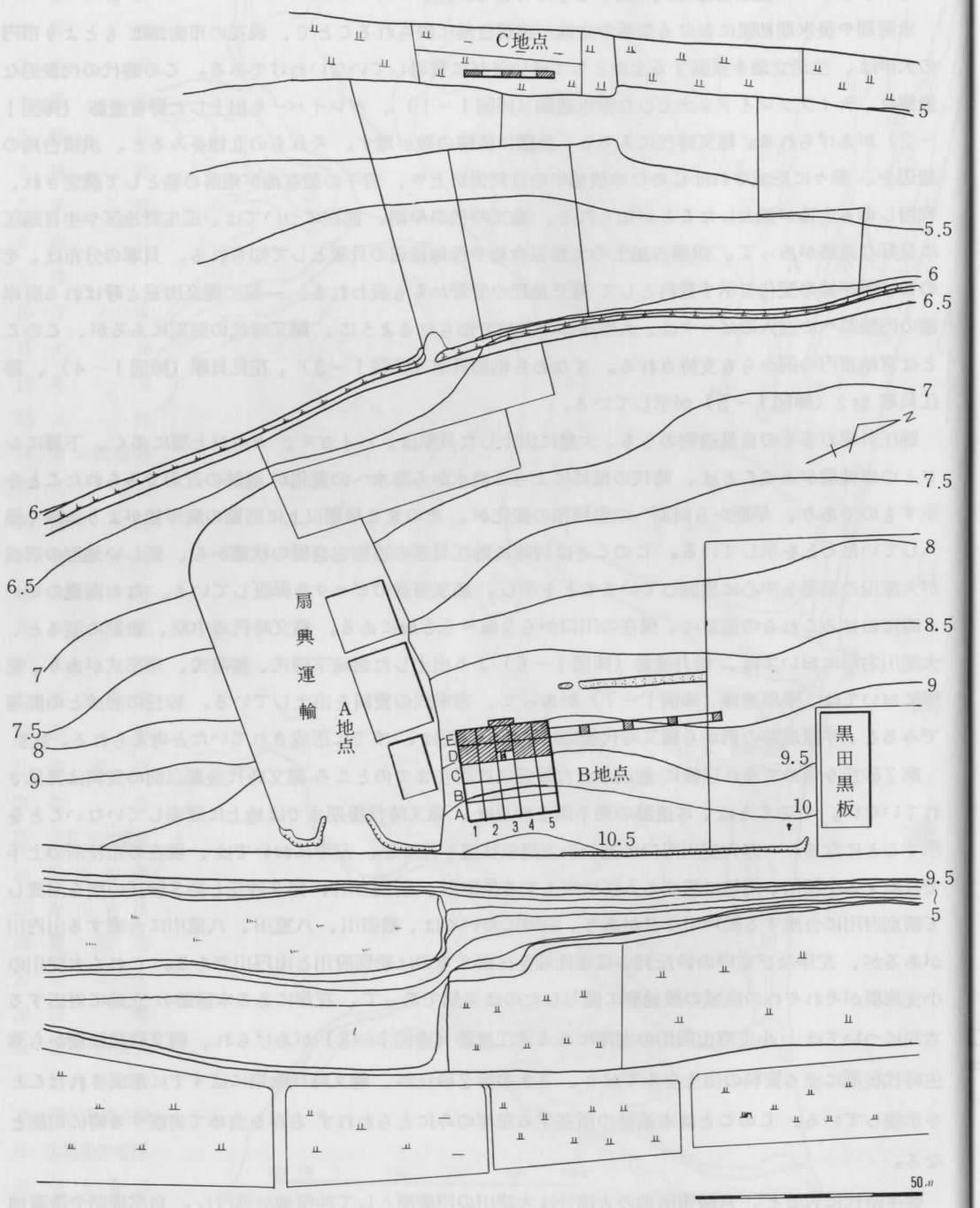
資料も宅地造成に伴う土砂の般入によって持ち込まれた資料であり、埋土を提供した地点を観察すれば洪積台地であることが認められる。なお従来知られている資料からすれば、前期旧石器時代の遺跡は認められず、すべて後期石器時代に属するものである。註1

氷河期や後氷期初頭における集落の立地が洪積台地に限られることで、現在の市街地はもとより市内の大半は、生活立地を提供する土地としてはいまだに登場していないわけである。この時代の代表的な遺跡は、ナイフブレイドを出土した垂水遺跡（挿図1－1）、グレイバーを出土した野首遺跡（挿図1－2）があげられる。縄文時代に入ると、急激に遺跡の数が増す。それらの立地をみると、洪積台地の縁辺や、除々に形成されはじめた沖積地中の自然提防上や、若干の徴高地が集落の場として撰定され、利用し得る土地が拡大したことが知られる。縄文時代の早期、前期については、瓜生野地区や生目地区に良好な遺跡があって、洪積台地上の土器包含地や台地縁辺の貝塚として知られる。貝塚の分布は、そのまま海岸線の変化を示す資料として歴史地理の分野からも扱われる。一般に縄文海進と呼ばれる海岸線の内陸部への進入のピークは、大平洋岸の各地で知られるように、縄文時代の前期にあるが、このことは宮崎市内の例からも支持される。すなわち柏田貝塚（挿図1－3）、花見貝塚（挿図1－4）、跡江貝塚 註2（挿図1－5）が示している。

跡江貝塚の多くの自然遺物のうち、大量に出土した貝類は、ハイガイ、カキが上層に多く、下層にシジミの単純層があることは、時代の推移によって淡水から海水への変化が遺跡の近辺でみられたことを示すものであり、早期から前期への動物相の変化が、そのまま早期以上に前期の海岸線がより奥深く浸入していたことを示している。このことは同時に跡江貝塚の遺物包含層の状態から、新しい地形の形成が大淀川の活動を中心に展開していることを示し、縄文海進のピークを保証している。なお海進のピーク時におけるこれらの遺跡は、現在の川口から9㎞～9.5㎞にある。縄文時代の中期、後期に至ると、大淀川右岸においては、曽井遺跡（挿図1－6）より出土した岩崎下層式、指宿式、市来式があり、左岸においては、平原遺跡（挿図1－7）があって、市来式の資料を出土している。砂丘の形成との関連でみると、平原遺跡の例から縄文時代後期には第1砂丘は、すでに形成されていたと考えられる。註3

第2砂丘を含めてそれ以後に形成された砂丘には現在までのところ縄文時代後期以前の資料は発見されていない。このことは、本遺跡の乗る第2砂丘は、縄文時代後期までは地上に登場していないことを示すことになる。一方大淀川河口に近い小支流の状況をみると、左岸においては、現在の市役所の上手で合流する小松川、川口に接する入江に流入する後田川、新別府川、第2砂丘と第3砂丘の間を南流して新別府川に合流する船戸川などがあり、右岸においては、鶴田川、八重川、八重川に合流する山内川があるが、左岸及び右岸の砂丘列のほぼ先端を区画するのは新別府川と山内川である。これら大淀川の小支流群がそれぞれの流域の徴地形に関与したのは当然であって、左岸にある本遺跡の立地に対応する右岸については、小支流山内川の右岸にある赤江遺跡（挿図1－8）があげられ、縄文時代晩期から弥生時代後期に至る資料の出土をみており、さきの第2砂丘が、縄文時代晩期にはすでに形成されたことを示唆している。このことは本遺跡の所在する左岸のみにとらわれず右岸を含めて考察する時に可能となる。

弥生時代に入ると、宮崎市街地の大部分は大淀川の氾濫原として沖積地が進行し、自然堤防や徴高地を形成する中で、基地を含めた集落立地を点在させることになる。弥生時代前期の代表例は、檍遺跡



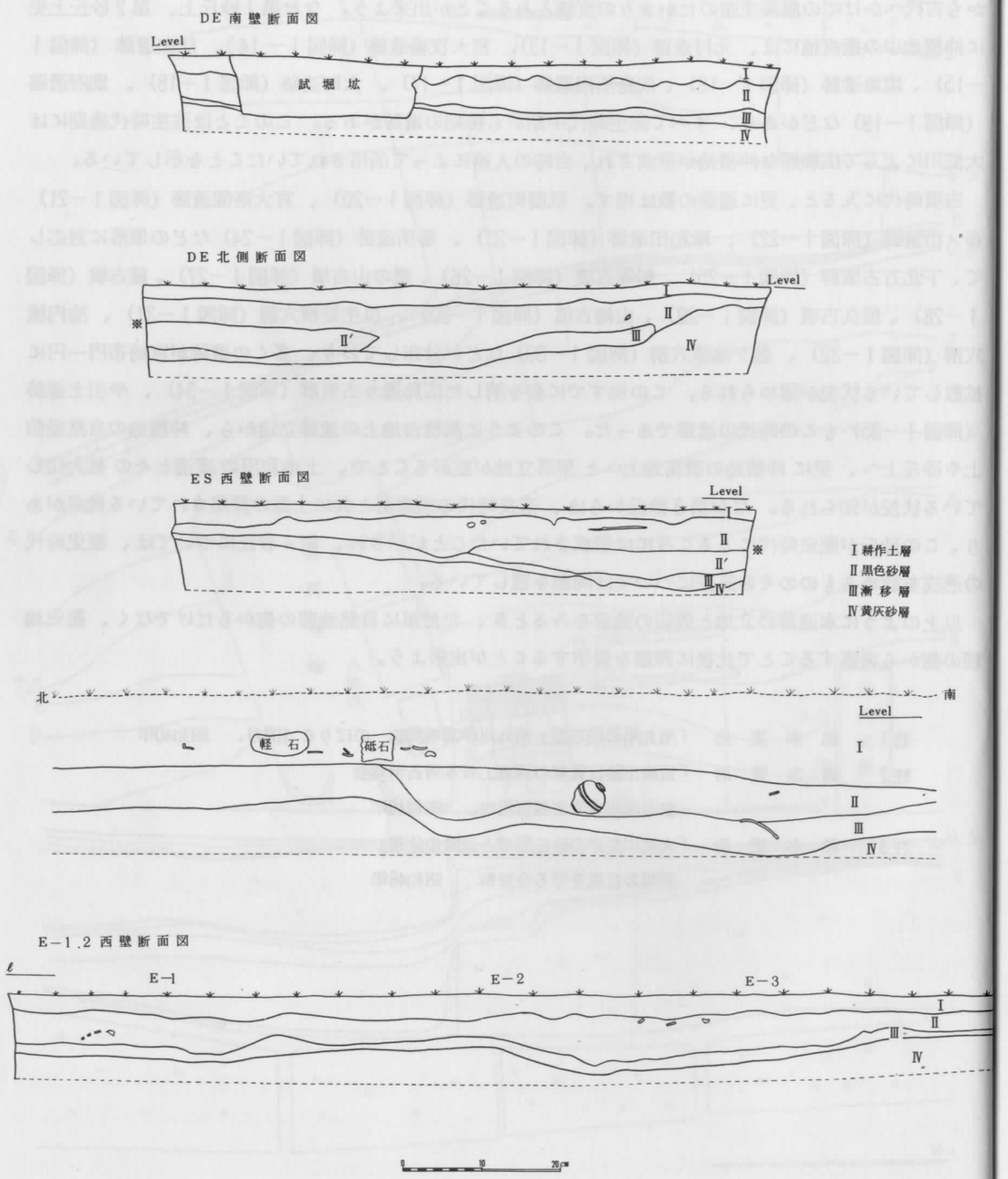
第2図　宮崎市山崎町石神遺跡地形図

（挿図１－９）である。前期の板付Ⅱ式土器を供献資料として確認した石蓋土壙や、同時期の甕棺墓が出土しており、第１砂丘の南端に位置し現在の檍中学校の校地内に存在する。近くの浮之城遺跡（挿図１－10）、大島遺跡（挿図１－11）、冬至遺跡（挿図１－12）はそれぞれ弥生時代中期、後期、古墳時代の集落址であり、時代が新しくなるにつれて、遺跡の規模が拡大している。このことは原始時代終末から古代へかけての農業生産のたかまりの反映とみることが出来よう。なお第１砂丘上、第２砂丘上更に沖積地中の微高地には、元村遺跡（挿図１－13）、宮大牧場遺跡（挿図１－14）、江田遺跡（挿図１－15）、塩路遺跡（挿図１－16）、刑務所内遺跡（挿図１－17）、大町遺跡（挿図１－18）、別府遺跡（挿図１－19）などがあり、すべて弥生時代中期から後期の遺跡がある。このことは弥生時代後期には大淀川によって広範囲な沖積地が形成され、当時の人達によって活用されていたことを示している。

古墳時代に入ると、更に遺跡の数は増す。祇園町遺跡（挿図１－20）、宮大茶園遺跡（挿図１－21）春ノ山遺跡（挿図１－22）、津和田遺跡（挿図１－23）、番所遺跡（挿図１－24）などの集落に対応して、下北方古墳群（挿図１－25）、船塚古墳（挿図１－26）、庵の山古墳（挿図１－27）、麓古墳（挿図１－28）、恒久古墳（挿図１－29）、山崎古墳（挿図１－30）、瓜生野横穴群（挿図１－31）、池内横穴群（挿図１－32）、蓮ケ池横穴群（挿図１－33）などが分布しており、多くの遺跡が宮崎市内一円に拡散している状況が認められる。この他すでに姿を消した広島通り古墳群（挿図１－34）、や引土遺跡（挿図１－35）もこの時代の遺跡であった。このように洪積台地上の遺跡立地から、沖積地の自然堤防上や砂丘上へ、更に沖積地の微高地上へと集落立地が拡がることで、土地利用の変遷とその拡大化している状況が知られる。なお第３砂丘からは、奈良時代の須恵器と共に土錘の採集されている地点があり、この砂丘が歴史時代に入るころには形成されていたことが示され、第４砂丘については、歴史時代の形成を認めるもののその詳細については問題を残している。

以上のように本遺跡の立地と周辺の遺跡をみるとき、ただ単に自然地理の側からだけでなく、歴史地理の側から考察することで此後に課題を提示することが出来よう。

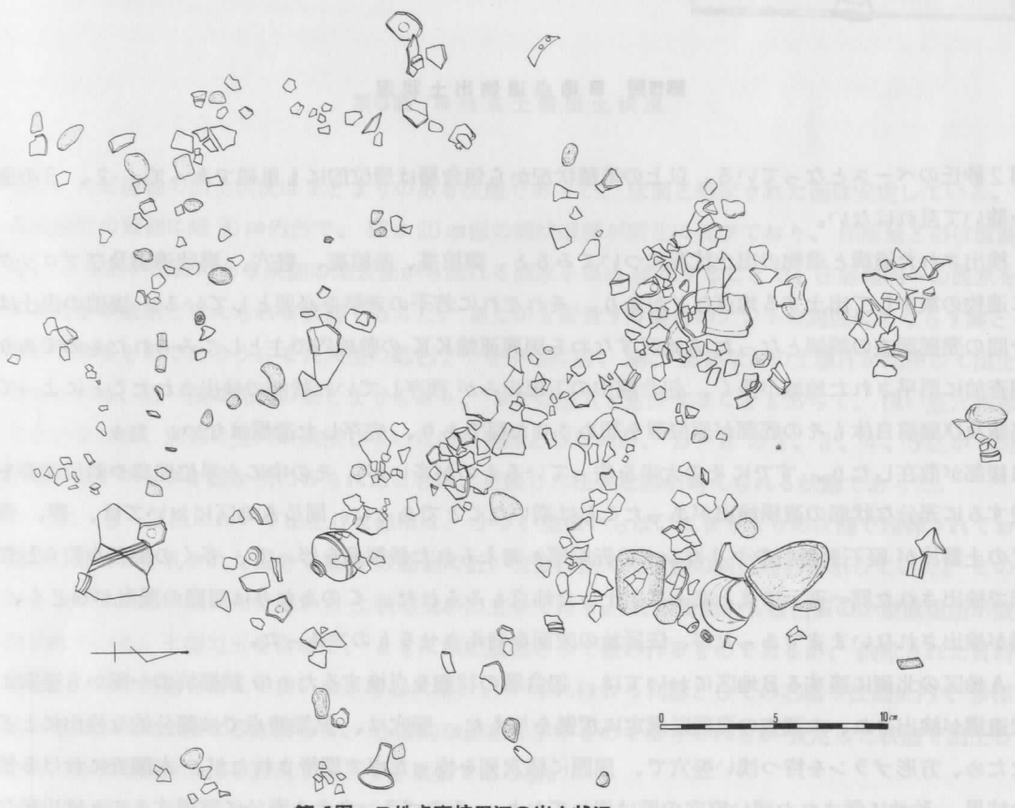
註１　鈴木重治「南九州の旧石器」南九州学園機関誌　のぼりこ 103号、昭和40年
註２　鈴木重治「宮崎市跡江貝塚の調査」日本考古学協会
第31回総会発表要旨所収、昭和40年
註３　鈴木重治「大淀川左岸の砂丘形成と遺跡の分布」
宮崎の自然を守る会資料　昭和46年



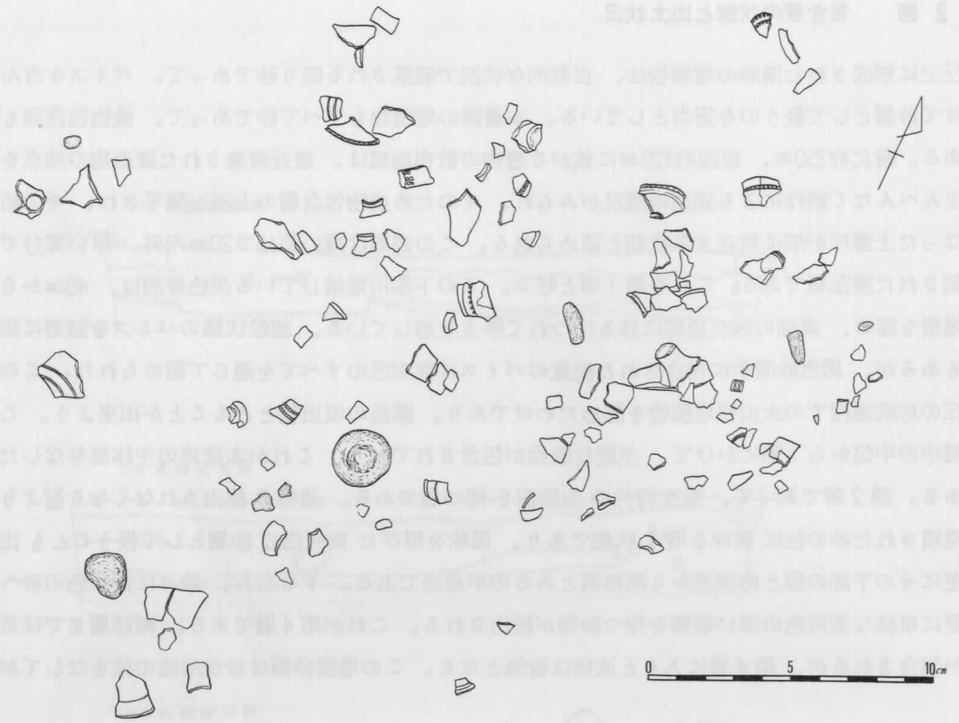
第3図　各地区土層図

第 2 節　包含層の状態と出土状況

砂丘上に形成された遺跡の堆積物は、自然的な状況で観察される限り砂であって、パミスを含んだ層も合せて砂層として扱うのを妥当としている。本遺跡の堆積物もすべて砂であって、遺物包含層も砂層中にある。南北約250m、東西約120mに拡がる遺物の散布地域は、最近構築された建造物の地点を除いて、まんべんなく耕作による表層の攪乱がみられ、そのため遺物包含層の上面が削平され、その結果細片となった土器片が畑に散在する状態と認められる。この表層は薄い部分で20cm内外、厚い部分で30cmが計測された攪乱層である。これを第1層と呼ぶ。この下部に堆積している黒色砂層は、40cmから60cm程の堆積を認め、東側の砂丘頂部に移るにつれて厚さを増している。細粒状態のパミスを顕著に認める部分もあるが、黒色砂層中に包含された微量のパミスは発掘区のすべてを通じて認められた。このことは砂丘の形成過程での火山性堆積物を認めたわけであり、霧島の噴出物とみることが出来よう。この黒色砂層中の中位から下部にかけて、主要な遺物が包含されており、これが本遺跡の主体部をなした文化層である。第2層であって、弥生時代の生活面を持つ層である。遺物の検出されなくなる面より下部は、堆積された砂の色に黄味を増す状態であり、黒味を帯びた黄灰色の砂層として扱うことも出来るが、更にその下部の層との関連から漸移層とみるのが適当である。すなわち、除々に黄灰色の砂へと移り、更に単純な黄灰色の厚い堆積を持つ砂層が検出される。これが第4層である。漸移層までは若干の遺物が包含されるが、第4層に入ると遺物は皆無となる。この堆積砂層は砂丘形成の核をなしており、



第4図　B地点壺棺周辺の出土状況

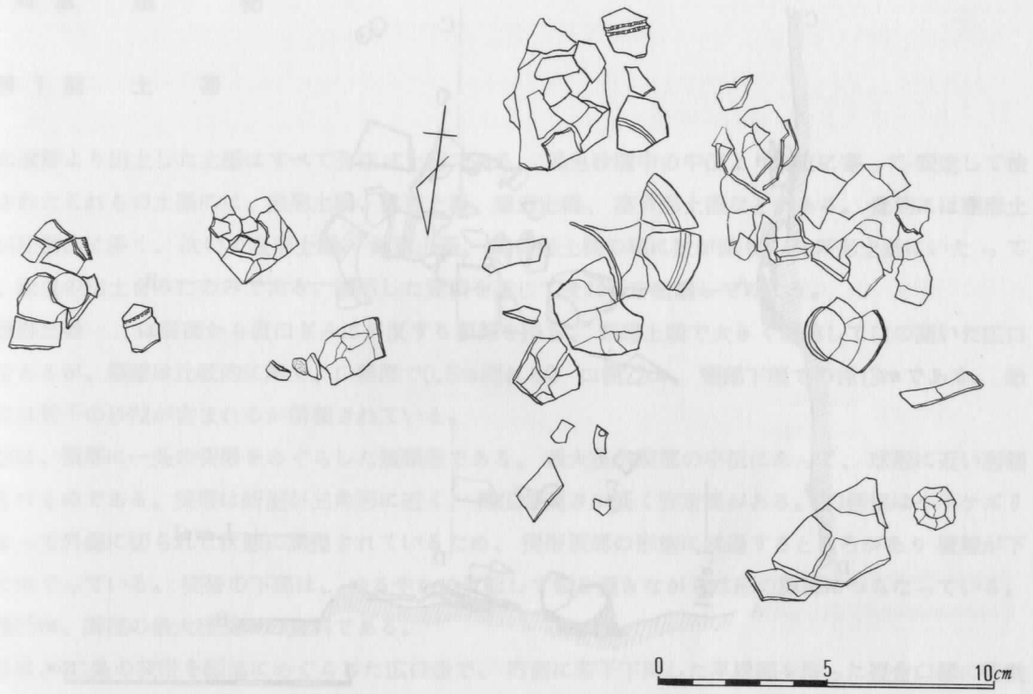


第5図　B地点遺物出土状況

第2砂丘のベースとなっている。以上の堆積状況から包含層は層位的にも単純であって、2、3の遺構を除いて乱れはない。

検出された遺構と遺物の出土状況についてみると、甕棺墓、壺棺墓、竪穴、溝状遺構及びブロック状に遺物の集中して出土する地点などがあり、それぞれに若干の考察を必要としている。甕棺の出土は、今回の発掘調査の端緒となったA地区すなわち扇興運輸KKの敷地内で主としてみられたものであり、調査前に削平された地域が多く、包含層中の下部のみが残存していた状態で検出されたことによって、墓壙及び甕棺自体もその底部が原位置を認めさせた程であり、完存した遺構はない。註4
口縁部が散在したり、すでにその大半を失っているものが多いが、その中に水平位埋葬や斜位埋葬を示唆するに充分な状態の遺構検出があったことは幸いなことであった。同じA地区においては、甕、壺などの土器片が軽石製器台やヤリガンナの先端部と考えられた鉄製品を伴って、多くの焼石を散らした状態で検出された同一面上にまとまって出土した地点もみられた。このあたりは周囲の攪乱がひどく、遺構が検出されないままであったが、住居址の床面を考えさせるものであった。

A地区の北側に接するB地区においては、包含層の状態を点検するための試掘坑の一部から竪穴と溝状遺構が検出され、本調査の発掘区選定に根拠を与えた。竪穴は、試掘時点では部分的な検出にとどめたため、方形プランを持つ浅い竪穴で、周囲に柱穴列を持った点で期待されたが、本調査における拡張の結果、砂地に営まれた浅い竪穴の壁は崩れており、そのプランさえも充分に確認することは出来なか

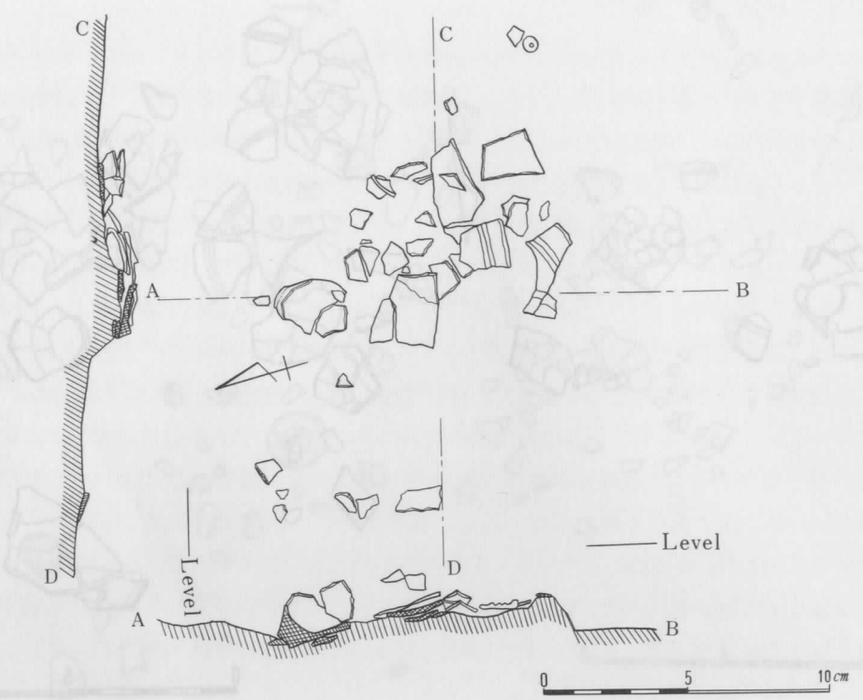


第6図　B地点土器出土状況

った。ただ遺物の出土状況はまとまりのある状態であって、床面と想定された面は安定している。なおこの竪穴の東側に幅30cm内外で、深さ20cm程の溝状遺構が南北に延びており、住居址との位置関係から、より高い位置にある東側の地表面から流れる雨水を集め排水することで、住居地内への流水をおさえるための遺構と考えられる状態であった。あたかも野営する場合のテントの周囲にめぐらす溝と意を同じくするものであろう。また大型の砥石2ケを中心に壺、甕、高杯などの土器片が集中して出土するブロックは、同一面に焼石のまとまりもあり、さきの竪穴と近接することもあって、浅い竪穴同志の切り合いなのか、別個の竪穴が隣接していたのか判然としないが、D－Eの2、3、4、5区から図示した通りのブロックが数ケ所にみられたことは、近接した住居址群が考えられる状態であった。

一方、E－3区において出土した壺棺は、小さい墓壙いっぱいにぎりぎりの状態で埋葬されており、底部に寄って穿孔された部分を墓壙の底面に近い位置に据えた状態の斜位埋葬を示していた。この壺棺から3m程東北に離れた位置から土製勾玉が出土しており、その周囲から軽石製の小型模造品が数点検出されている。土製勾玉を含めて、ともに祭祀遺物として扱われるものであるが、供献された資料や副葬品としての用途を考えてよいのかもしれない。いずれにしろ利器としての石器や住居址内で多様な用途を与えられた土器などと異って、心情的な側面を示すものでありこれらが安定した状態で出土したことは、当時の精神文化を思考する上でも重要であろう。

A、B両地区の西方は、砂丘が除々に下降して水田地帯につらなっているが、砂丘の縁辺までは畑地



第7図　B地点カメ棺出土状況

として利用されており、地表での土器片の散布はこのあたりまで続いている。この水田地帯は、古い入江であると同時に沖積化が進んで埋没してからは、低湿地として砂丘後背地を形成し、南北に細長い位置を占め、湧水にもめぐまれ、当然予想されたのが弥生時代の水田址の埋蔵であり、湿地帯特有の木器の包含であった。C地区と呼んで、砂丘縁辺に沿った水田中に発掘坑を設定したわけである。この位置での堆積状況は、地表の水田泥土に続いて、酸化鉄のために硬化した水田ベッドがみられ、その下部は炭化の進んでいない葦の茎や根を多量に含んだ泥砂が堆積している。発掘作業は湧水のため困難を極めたが、水田ベッド下の泥砂の中からローリングを受けて表面の磨滅した土器片や、細木片の出土をみることが出来た。このことから将来に期待を持たせたものの、今回の調査では遺構の検出はみられなかった。

以上の状況から将来の調査にあたっては、A地区周辺の甕棺を中心とした墓地、B地区における住居址、更にC地区における生産遺構としての水田址の検出が注意されてよいものであろう。

註4　石川恒太郎・鈴木重治「石神弥生遺跡調査概報」
宮崎市文化財調査報告書　昭和46年

第4章　遺　物

第1節　土　器

本遺跡より出土した土器はすべて弥生式土器である。黒色砂層中の中位より下位に寄って安定して検出されたこれらの土器には、壺形土器、鉢形土器、甕形土器、高坏形土器などがある。量的には甕形土器が圧倒的に多く、次いで壺形土器、鉢形土器、高坏形土器の順に数が減り、高坏形土器にいたっては、数点の出土をみたのみである。図示した資料を通じてそれらを概観してみよう。

壺形土器　1は肩部から直口ぎみに外反する頸部を持ち、頸部上端で大きく屈曲して口の開いた広口壺であるが、器壁は比較的に薄く、口唇部で0.8cm測れる。口径22cm、頸部下端での径13cmである。胎土には若干の砂粒が含まれるが精製されている。

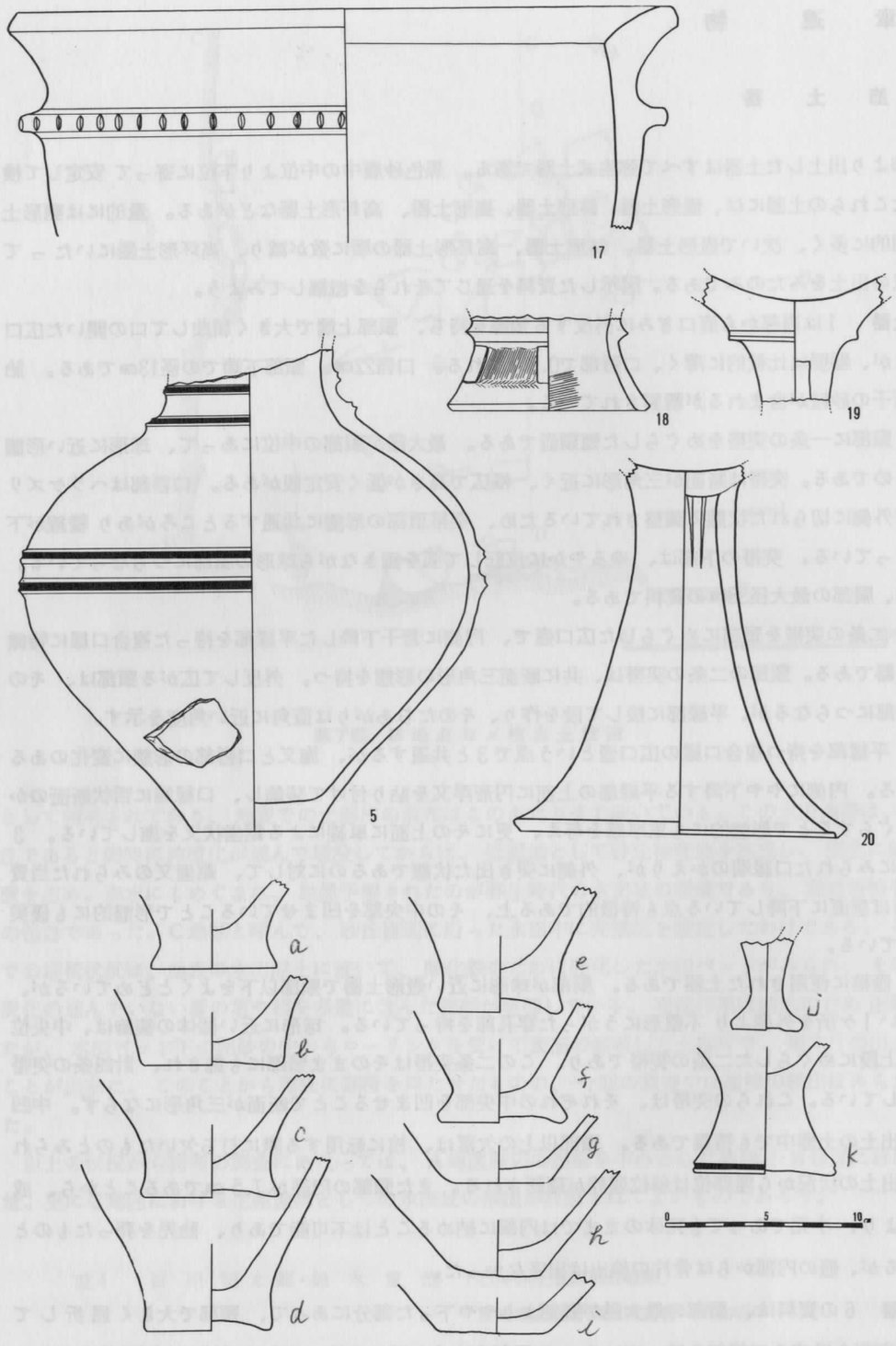
2は、頸部に一条の突帯をめぐらした短頸壺である。最大径が胴部の中位にあって、球形に近い形態をもつものである。突帯は断面が三角形に近く、幅広で高さが低く安定観がある。口唇部はヘラケズリによって外側に切られた状態に調整されているため、突帯頂部の形態に共通するところがあり稜線が下端にめぐっている。突帯の下部は、ゆるやかに反転して弧を画きながら球形の胴部につらなっている。口径15cm、胴部の最大径38cmの資料である。

3は、二条の突帯を頸部にめぐらした広口壺で、内側に若干下降した平縁部を持った複合口縁に特徴のある土器である。頸部の二条の突帯は、共に断面三角形の形態を持つ。外反して広がる頸部は、そのまま口縁部につらなるが、平縁部に接して段を作り、そのたちあがりは直角に近い角度を示す。

4は、平縁部を持つ複合口縁の広口壺という点で3と共通するが、施文と口唇部の形態に変化のある資料である。内側にやや下降する平縁部の上面に円形浮文を貼り付けて装飾し、口縁端に舌状断面のかえりをめぐらすことで形態的にも重厚感を与え、更にその上面に単線による鋸歯状文を施している。3の広口壺にみられた口縁端のかえりが、外側に突き出た状態であるのに対して、鋸歯文のみられた当資料は、ほぼ垂直に下降している点も特徴的である上、その中央部を凹ませていることで形態的にも優美さを増している。

5は、壺棺に使用された土器である。胴部が球形に近い壺形土器で頸部以下をよくとどめているが、底部に近い1ケ所を外側より不整形にうがった穿孔部を持っている。球形に近い器体の装飾は、中央位及びその上段にめぐらした二条の突帯であり、この二条突帯はそのまま頸部にも施され、計四条の突帯文を構成している。これらの突帯は、それぞれの中央部を凹ませることで断面が三角形にならず。中凹みの点で出土の土器中でも特異である。頸部以上の欠落は、棺に転用する際に打ち欠いたものとみられる。なお出土の状況から埋葬位は斜位埋葬が確認される。また頸部の内径が7.5cmであることから、成人はもとより、小児であっても死体のままでは内部に納めることは不可能であり、胎児を葬ったものと想定されるが、壺の内部からは骨片の検出は出来なかった。

鉢形土器　6の資料は、胴部の最大径が頸部よりやや下った部分にあって、頸部で大きく屈折して「く」の字形を呈する口縁部を持っている。口唇部の中央に凹みを持つことで単純な口唇装飾とみられるが、胎土自体が壺形土器より精選されていないため器壁の表面が粗く、装飾的効果は薄い。口径25cm



第8図　出土土器実測図

が測れる。

7は、「L」字状口縁に近い形態を持った鉢であるが、口縁部のかえりが上面でやや内反りになっているため、頸部外側の屈折点はシャープな折り反しにならず、ゆるやかな外彎がみられる。口唇部の中央は、6と同様に中央部が凹められ、一条の凹線文をめぐらしたかのような状況である。

甕形土器　8は、肩部に最大径を持ち、内反りぎみに直行して頸部を作り、そのままゆるやかに外反して口縁部を形成した単純な形態の甕である。口唇部は肥厚して丸味を持っているが、部分的に厚さを増すだけで、胴部の器壁の厚さより0.2㎝多く計測される。口径24㎝を示している。

9は、形態は小型であるが、整形及び器壁の調整は良好であって、頸部あたりで縦位に、胴部で斜位のブラシによる器面調整がみられる。外反する口縁は、頸部の屈折が8より明瞭であって、内側に稜線がみられる。口径18㎝の資料である。

10は、形態的には単純な甕形土器であるが、口唇部の整形に1つの特徴が認められる。すなわち、口唇部の上端をヘラケズリによって整形し、更にその下部に凹線をめぐらすことで縁帯文状の装飾としていることである。また内面のブラシによる器面調整は、口縁に寄って横走し、胴部に入って斜位に走る状態で認められる。口径19㎝を示す。

11は、口縁部を欠く資料であるが、8に示した土器と共通するところが多く、胴部以下の形態をよく残している。底部は中央を浅く凹めた点に特徴があって、すわりがよく安定した形態である。底部の径は6㎝が測れる。器壁外面には粗いブラシの調整痕が縦走している。

12は、直行した口縁が肥厚して胴部より厚く整形され、口縁直下に断面三角形の二条の突帯をめぐらし、その頂部にヘラによる刻み目を施した土器である。いわゆる刻目突帯の甕であるが、刻み目そのものは粗い。口径19㎝が測れる。

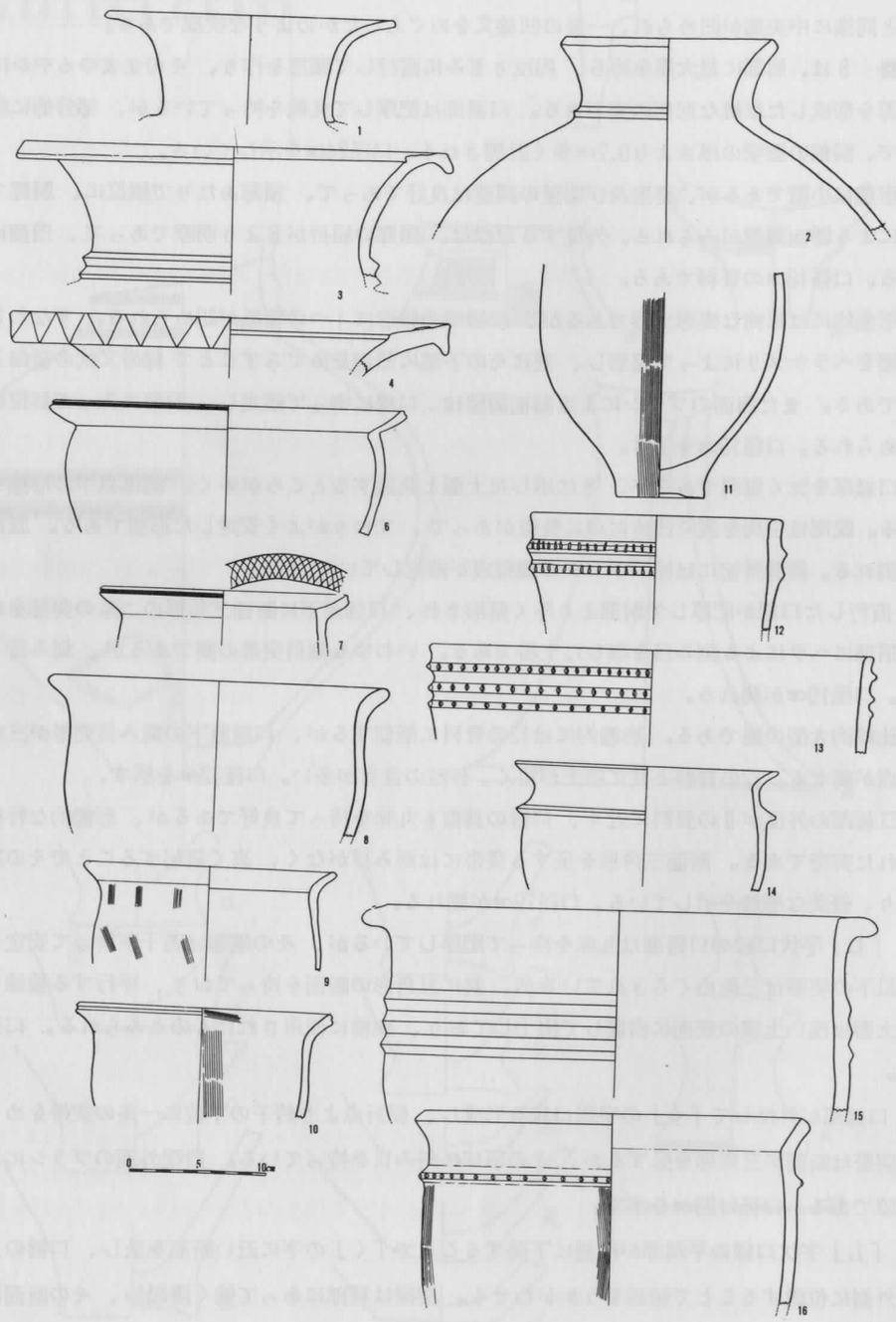
13は、比較的大型の甕である。形態的には12の資料に極似するが、口縁直下の刻み目突帯が三条施されている点が異なる。12の資料と共に胎土が粗く、砂粒の含有が多い。口径32㎝を示す。

14は、口縁部の外反が9の資料に近く、口唇の調整も丸味を持って良好であるが、形態的な特徴は肩部に施された突帯である。断面三角形を呈する突帯には刻み目がなく、高く隆起することでその頂部は稜線を作り、優美な形態を示している。口径19㎝が測れる。

15は、「L」字状口縁の口唇部は丸味を持って肥厚しているが、その端縁は若干下降して安定している。肩部以下の突帯は三条めぐらされているが、共に三角形の断面を持っており、平行する稜線を認める。この土器は浅い土壙の底面に密着して出土しており、甕棺に使用されたものとみられる。口径39㎝が測れる。

16は、口縁部が外反して「く」の字形口縁を形成し、屈折点より若干の下位に一条の突帯をめぐらしている。突帯は断面が三角形を呈するが、その頂部に刻み目を持っている。器壁外面のブラシによる調整痕は明瞭である。口径は29㎝を示す。

17は、「L」字状口縁の平端部が内側に下降することで「く」の字に近い断面を呈し、口唇の上端より下端が外側に位置することで稜線をうかがわせる。突帯は肩部にあって強く隆起し、その断面は台形に近く、頂部に刻目を持つが、その間隔は若干乱れている。15と同様の出土をしており、甕棺として使用されたものと考えられる。口径は33㎝を示す。



第9図　出土土器実測図

高坏形土器　18は、坏部と脚部を区画する位置に断面三角形の一条の突帯をめぐらし、大きく外彎して安定した底部を持った高坏である。脚部は低く、上端と下端との比が大きくなく、しかも下端をヘラケズリにより面取りを有することで優美さを増している。なお脚部中央位にある穿孔は縦長の長方形である。

19は、18と同様に坏部と脚部を分ける位置に一条の突帯をめぐらし、脚部中央位に縦長の長方形穿孔を持っているが、脚部の高さが長い点で異る。全体を通じて装飾構成の意識は、18と規を一にしている。ともにB地区から出土している。

20は、赤色顔料を器面に塗付した唯一の資料であり、ラッパ状に裾に広がる形態は、突帯も穿孔部も持たないが、単純な形態と安定した底部によって、赤色顔料のみの装飾が生かされている。破壊されたA地区の甕棺墓の近くから出土していることから供献土器と考えられる資料である。

底部、一括して図示した底部には、貼付円板による底部は一点もなく、また丸底の資料も皆無である。小型の平底、中央部を浅く凹めた底部があるが、すべて安定した底部であり、球体を持った壺形土器や焼成良好の甕形土器に対応する。甕棺に使用された土器の底部を含めて、斉一性のある底部といえよう。

以上みてきた出土の土器は、その形態上の特徴から弥生時代前期末の伝統的な技法を受け継ぐものが一部の甕形土器の中にみられるとはいえ、一括して扱うかぎり弥生時代中期の編年的位置が与えられる一群としてみるのを妥当としている。宮崎県内の資料からすれば、高千穂町岩戸遺跡、延岡市差木野遺跡、同じく三輪町遺跡、宮崎市元村遺跡、同じく原町遺跡などと共に、宮崎市檍遺跡に後行し佐土原町下那珂遺跡、清武町加納遺跡などに先行する時期の資料として検討される一群といえよう。

第2節　石　器

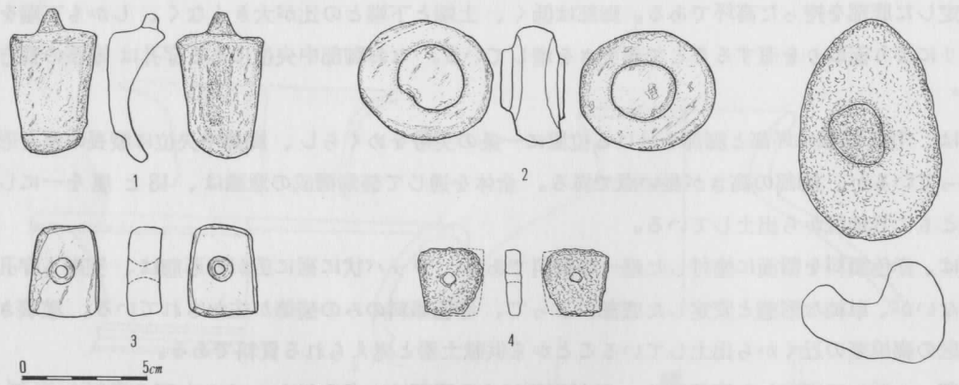
出土石器を機能的に大別すれば、石鏃、石斧、小型ノミ型石器、すり石、凹石、砥石、器台など多岐にわたっている。また昭和28年石川恒太郎氏によって註(1)、先の一部欠損した一点の石戈が発見されているが、今回は確認することができなかった。また石包丁も完形のものは検出できず、断片的な資料だけに終った。以下機能的な分類にしたがって記載する。

磨製石鏃　第11図　(1)　(2)　(3)　(4)　(5)

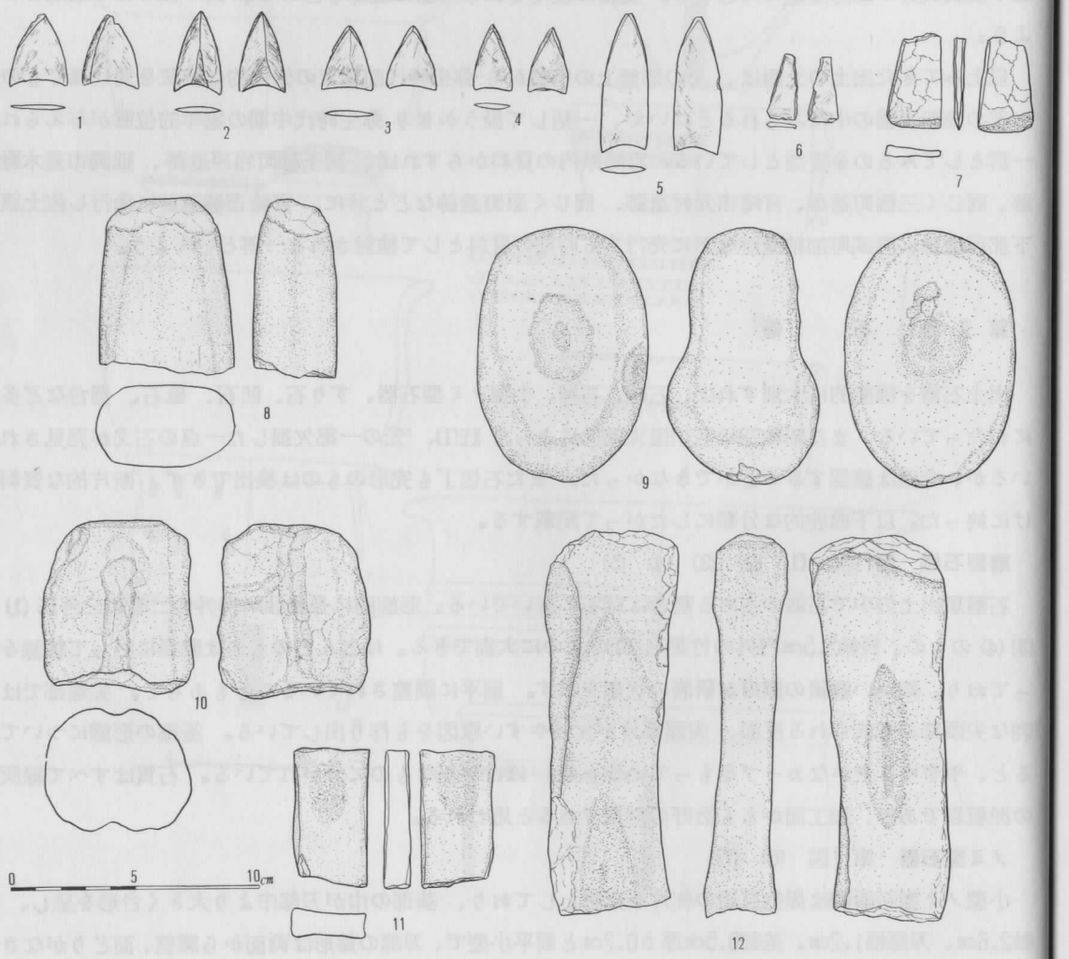
石器類出土の中で石鏃の占める割合は砥石に次いでいる。形態的に長軸3㎝内外の二等辺三角形(1)(2)(3)(4)のもの、長軸5.5㎝内外の竹葉形(5)のものに大別できる。ほとんどのものは軸長に沿って稜線をもっており、細かい縦縞の擦痕が研磨の状態を示す。扁平に調整されていることもあって、尖端部では鋭利な尖頭部が形成される反面、尖頭部分が欠けやすい原因をも作り出している。基部の形態についてみると、ややゆるやかなカーブをもっているもの、ほぼ平担なものに分かれている。石質はすべて緑灰色の泥板岩であり、加工面からも恰好の材質であると思われる。

ノミ型石器　第11図　(6)　(7)

小型ノミ型石器(6)は黒色頁岩の剝片を素材としており、基部の巾が刃部巾より大きく台形を呈し、長軸2.6㎝、刃部幅1.2㎝、基部0.5㎝厚さ0.2㎝と扁平小型で、刃部の整形は両面から調整、面どりがなされ擦痕はラセン状に認められる。(7)の石器は器形は台形を有する。側面から調整がなされ、長さ3.8㎝、刃



第10図　軽石製品実測図



第11図　石器実測図

部幅2cm、厚さ0.5cmと前者に比較するとやや大型のノミ型石器といえ、石質は砂岩質である。着柄の痕跡を見いだせず、使用については諸説があるが、明確さを欠く。いずれにしても類例の少ない資料でもあり、今後に期待をしたい。

石　斧　第11図 (8)

石斧は砂岩製の完全な資料ではないが、残された断面はカマボコ状を呈しており全体が磨かれている。刃部は欠損しており普遍的な石斧と見られる。

凹み石　第11図 (9)

石質は硬質の砂岩を利用し部分的に磨石の用途もうかがえ、敲き石としての要素も加わっている。断面はひょうたん型をしており、そのくびれた部分が、凹状になっている。ただ一点の資料であり、手ごろな自然礫を利用している点類例の追加が望まれる。

石　錘　第11図 (10)

不整形な隋円をなしたこの砂岩質の石錘は下方を一部破損してはいるものの、重さ220 g で石器のほぼ中央に表裏に幅約1 cm の一条の浅いみぞを刻み、紐をしっかり安定した形に結べるように工夫してあり、錘としての機能は十分にもっている。またこの先端部は磨石にも利用されていたのではないかと思われる。

砥　石　第11図

石器群の中で一番出土例が多かったのが砥石である。弥生中期という宮崎平野では農耕社会も急激に展開しはじめた頃の影響もあるのであろうか。その形態は様々で、ほとんどが現在使用されているものとあまり変るところのないものである。

前回の予備調査では一点の鉄器の出土をみた。この鉄器はヤリガンナと判断され、日向では最古の鉄製品であった。そのような鉄の出現によって、石器を磨くばかりか、鉄の利器を磨くことも十分に行なわれたらしく、砥石の必要性があったと思われる。ここでは砥石の形態によって小型、中型、大型の三っに分類してみた。

小形砥石　(11)

両端を一部破損し全体の状況は不明であるが、幅2.5cm、厚さ1cmであり小型の部類に入る。両面に楕円形のくぼみがあり例面も砥石として利用されている。石質は砂岩である。

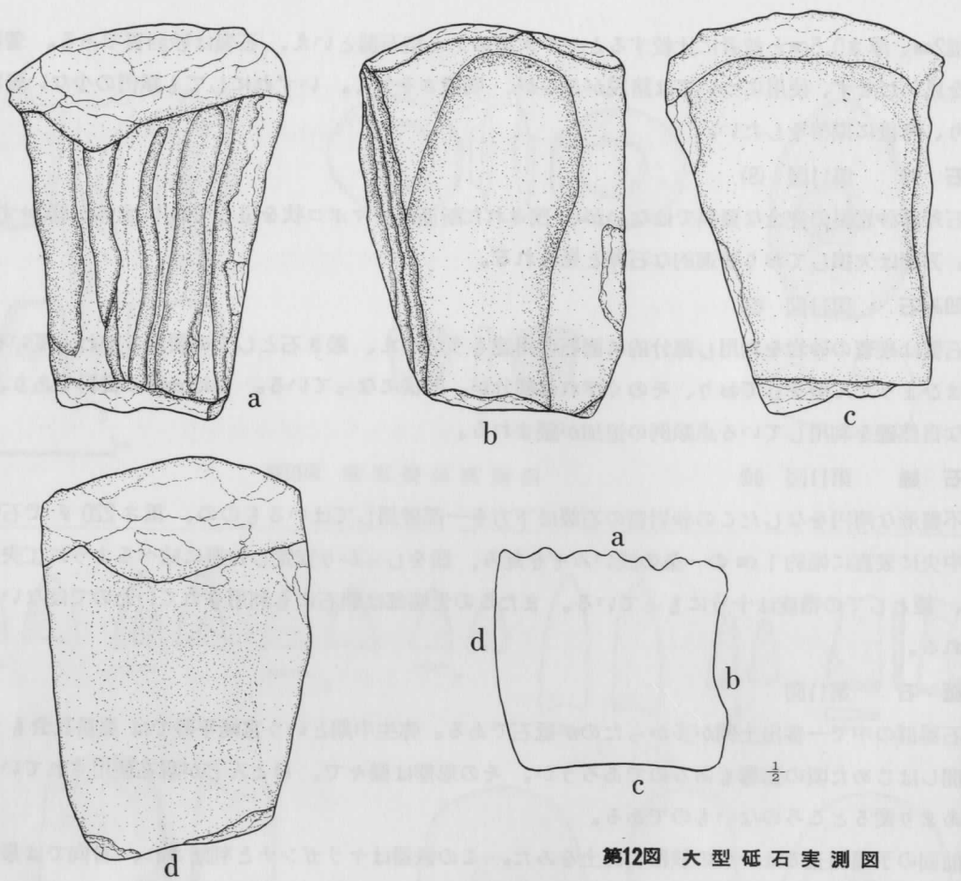
中型砥石　(12)

きめ細い硬質砂岩を素材とし、ほぼ長方形をなす。長さ31cm、幅9cm、厚さ4.5cmで中型に属する。砥石の両面とも中央部が楕円形状にくぼんでおりA面は左端がやや斜めに面どりされておりここも砥石として利用されている。A面、B面とも同じ砥石の状態を示しており比較的刃部幅の短かいものを砥いだと観察される。また側面もきれいに砥石としての機能をもち全体がゆるやかなカーブをもっている。

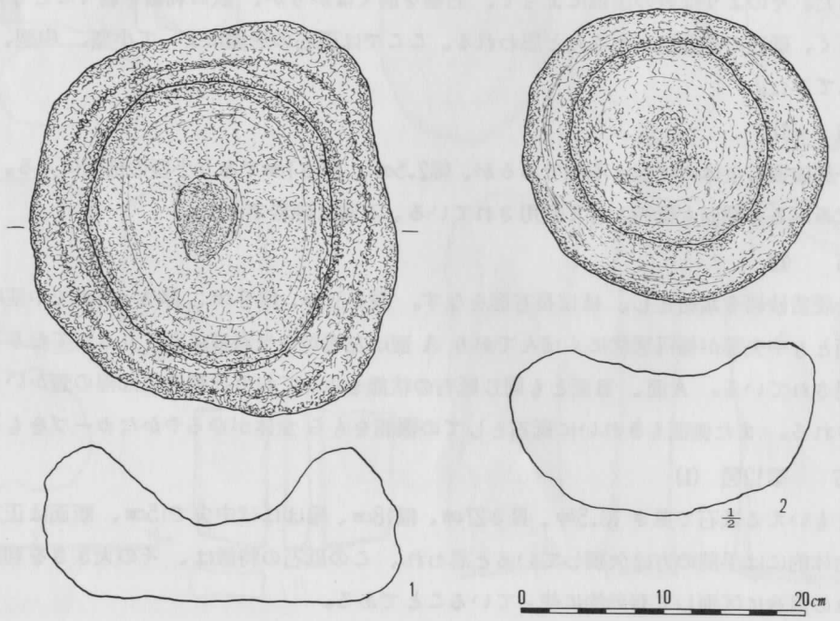
大型砥石　第12図 (1)

超大型ともいえる砥石で重さ13.5kg、長さ27cm、幅18cm、幅はほぼ中央で15cm、断面は正方形を呈している。全体的には手前の方は欠損していると思われ、この砥石の特徴は、その大きさを利用し、4面をそれぞれの用途に区別して有効的に使っていることである。

A面は不整形でやや蛇行した幅2～3cmの4本の沈線が長軸に沿って並んでいる。くぼんだ溝状の沈



第12図　大型砥石実測図



第13図　軽石製器台実測図

線は深い所で1㎝にも達し、右から2番目の溝状の線は一番磨耗率が高い。この面はあきらかに玉砥石と考えられるもので、ごく限られた特定のものを研磨している。B面はある程度まで全体的に平砥石として利用したのち、さらにその砥石面は限定したものにだけ使用したらしく下整形な楕円状のくぼみをもつ。C面は全体的に同じようなくぼみをもっており、B面と比較すると縦に長い道具を砥ぐのでなく、むしろ横は長い道具を砥いだと考えられ、一般的な形態をもっている。C面はA、B面とは逆に凸状の面をもち4面中一番現在使用されているものに近似している。この面はB面の道具よりもさらに大型の鎌の類等を砥いだと判断される。

以上のべた4面の違った機能をもっ砥石は当時の共同体の中で石器、および鉄器を研磨するうえになくてはならぬ必需品であったと考えられ、特定の個人の占有物ではなかったことを出土状況から示唆できる。ただ玉を砥いだと思われる面も玉類の全く認められない点問題を残すが、当遺跡の道具製作の上で重要な担手であったことは疑い得ない。

器　台　第13図 (1) (2)

2点とも軽石製で(1)はほぼ円形直径22㎝、厚さ11㎝の大型のもので中央部が直径14㎝にわたってくぼんでいる。底部はゆるかかにカーブしており、安定感はないが機能的には十分である。(2)は外形は少し角ばっているが中央部のくぼみは直径8㎝の円形をなし、深さ3㎝と(1)に較べると深いが、底部は平担に加工してあり安定している。

石神遺跡の出土石器が鉄器文化の影響を受けつつ製作されたのは、磨製石鏃の形態からもうかがえ、砥石の豊富な利用度も鉄器の存在を裏ずけるものであろう。日向灘を目前にしたこの砂丘遺跡は農耕祭祀的な性質をもつものであり、遺構との関連が確認されなかった点では今後に問題を残すが、宮崎平野における祭祀遺跡としての把握は十分になされた。

第3節　軽石製品および土製品

当遺跡は砂丘上に形成された地形的状況によるものか、軽石の出土が目立った。その大半は自然のものと思われるのだが、風化現象が激しく、自然のものか人工的なものか識別しがたいものもあった。こてに示した軽石製品は、あきらかに人工的と判断し得るものをあげた。

第10図　(1) (2)

(1)長さ6㎝、幅3.5㎝一番薄い部分が0.9㎝あり、形態は船の帆を思わせる。上部には0.5㎝程の突起をもち、下方は水平にけずられて段をなしている。内側は全体が楕円状に掘りくぼめられ、全体の断面に弧をなしている。

(2)は楕円形で長径が5.4㎝、幅2.5㎝さらにその中に一段と高く面どりを行ない、長径2.8㎝の円盤状の隆起をもった、車輪の格好にも似た形をしている。

(1)も(2)も用途、形態については全く不明である。しかし両者に共通して言えることは、何かの目的をもって、軽石という加工の比較的容易な利点をもったものに目をつけ、何かの意味をもつ形を創造しようとしたとしか考察できず、組合せてはじめて意味をもってくるものと考えられ、祭祀的要素を含んでいるが、前例がないだけに祭祀にどのような役割を果すものか今後に問題を残すといえよう。

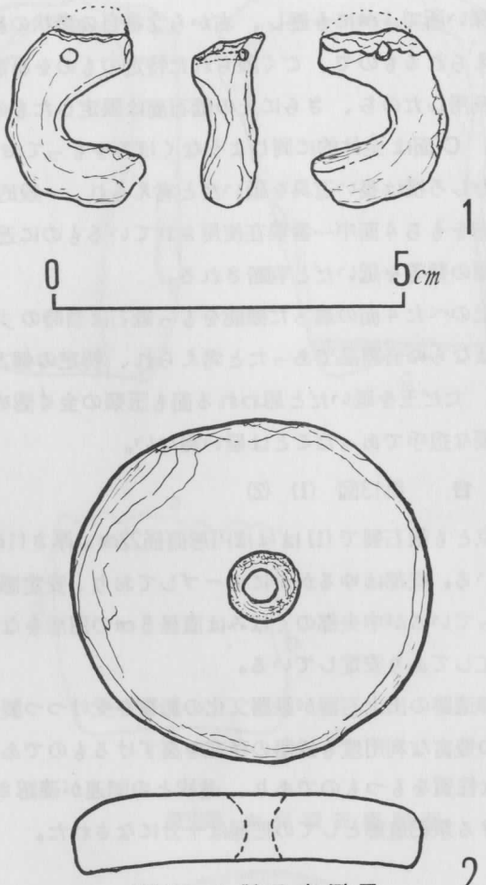
第10図　(3)　(4)

(3)は長さ3.7㎝、幅3㎝、厚さ1.4㎝で不整形な長方形である。全面に研磨が施され、それぞれに面どりが行なわれている。中央部には両面から穿孔され、浮子というよりペンダント的要素をもつものと思われる。

(4)は長さ2.6㎝、幅2.6㎝、厚さ0.6㎝の(3)と比較すれば小型のものである。原型はやや失なわれて各コーナーは風化されている。点線で復元してみると、ほぼ正方形になりその中央部に穿孔をもつ点では(3)の機能と同一であろう。

第10図　(5)

軽石礫を利用したもので長さ8.8㎝の楕円形である。ほぼ中央部に長径2.5㎝、深さ約1.5㎝の凹を有し、完全に穿孔されていない点では未製品と思われる。当遺跡では他にもこのように同じような類例の軽石礫の出土をみたが風化が激しく、ここでは一点のみを示した。



第14図　土製品実測図

その他の製品として図中に示さなかったが大型の軽石の上部面を皿状に凹せたものなどが出土している。

土製品

勾玉　第14図 (1)

当遺跡ただ一点出土の土製勾玉である。土器同様に焼成され、全体赤褐色を呈している。頭部は一部破損しているものの穿孔は残っている。全体は風化して粗雑に見えるが、もともとはきれいに調整されていたことが部分的にうかがえる。石製勾玉は確認されずその点では重要な資料といえよう。

紡錘車　(2)

直径5㎝、厚さ1㎝、黄褐色焼成の弥生式土器片を2次加工したもので、円盤状にヘラ調整が行なわれている。やや内彎した中央部に幅0.4㎝の両面からの穿孔をもち、紡錘車と思われる。

弥生中期の遺物を出土する鹿児島県山ノ口遺跡　註2　によると、その出土状況は「軽石製勾玉、軽石礫に刻目や穴を設けたものを配置している」とある。当遺跡では配石遺構は観察できなかったものの、これら一連の遺物は一定地域で非常にまとまった形で出土し、壺棺の出土状況等よりみて、山ノ口遺跡

との類似点も見いだされるのではないだろうか。また南九州的な農耕儀礼という点からも重要な資料といえる。

註(1)　石川恒太郎　「宮崎市阿波岐原砂丘遺跡」　(考古学雑誌、第43巻第4号)　昭和33年
註(2)　河口貞徳　(山ノ口遺跡)　鹿児島県文化財報告第7、　昭和36年

第5章　考　察

第一節　宮崎における弥生文化の編年上の位置

現在までに確認されている宮崎市内の弥生式土器のうち、最古のものは檍　註5　遺跡より出土した板付Ⅱ式土器である。それに先行する板付Ⅰ式土器の発見はいまだに知られていない。このことはひとり宮崎市内にとどまらず宮崎県内を通じても云えることであって、此後の追求に期待されることである。このことからも東南九州における弥生文化の展開を検討するに当っても弥生時代前期の中葉に位置づけられる檍遺跡の意義は大きいが、この時期の資料の系譜を考えるき、誰しも北部九州からの展開として理解しているがそれにつづく弥生中期の様相は単に北部九州からの影響のみとして単純にとらえることは出来ない。このことは宮崎県内のみでなく大分県下の弥生中期以降の資料を通じても指摘されるところである。

以上のことをふまえて、本遺跡の出土資料を中心に、関連する諸遺跡を通観しながら日向における弥生文化の展開の中での本遺跡の意義について検討してみよう。檍遺跡が弥生時代前期の中葉に位置することは、先に触れたがこの時期に先行する板付Ⅰ式土器の分布はその中心が筑前、肥前の海岸地方にあって、東に寄って下関付近にまでみられるが、ほとんど九州を出ていないことは注目されることである。　註6　またこれの遺跡は、縄文時代晩期の夜臼式土器を伴うことが知られると同時に貝塚を形成していることが多い点もみのがせないが更に重要なのは大陸系磨製石器を主とする石器群と金属器の登場である。合せて炭化米や籾痕土器を出土する遺跡や甕形土器の甑などは、水稲耕作を前提とするだけに、前段からの生産活動にあらたな形態が指摘されて当然である。この時期の資料が宮崎で発見されていないことは、新に登場した文化の門戸が北部九州にあったことを示すだけでなく、檍遺跡にもみられた板付Ⅱ式土器の分布が西瀬戸内から東瀬戸内を経て近畿地方へと急激に展開していることを合わせて考えれば、北部九州から東へ、一方、北部九州から南へと展開する弥生前期の中葉の様相を土器を中心とした変遷の中に認めることになる。

檍遺跡の甕棺群や石蓋土壙の出現は、これらの歴史的な動態をみることで肯首されるものである。檍遺跡の甕棺にも成人の埋葬に用いられたと考えられる大型甕の出土のないことは、前期の後半に至ってようやく北部九州でも今宿遺跡、柏崎遺跡、更に朝鮮の金海遺跡　註7　などで青銅利器の副葬をみた大型甕を用いた甕棺が出現し始めた点と合わせて留意する必要があろう。この時期の終末になって、東瀬戸内の影響のもとで、愛媛県下の阿方遺跡で典形的に指摘されるような西瀬戸内で一つの文化圏が構成されて来る。北部九州の東北部にようやく弥生時代中期的な要素を持った土器が登場する時期である。大分県下の大津遺跡　註8　一木遺跡、宮崎の下北方遺跡がこの時期に比定される。ここで特記せねばならないのが、弥生時代前期初頭の文化が東へ延びて行ったのに対して、その中葉の文化をふまえて後半から終末に至るとそのはねかえりとして、東瀬戸内の文化が西瀬戸内を経て九州に影響を与え始めた事

実である。大分県下の大津遺跡や同じ下城遺跡などにおいてみられる櫛目文の資料であり竹管文を伴う弧文によって指摘される。これら近畿や瀬戸内文化の逆流入を示す資料は、東九州の一部で弥生時代後半より終末にみられたものの、地域的に限定されて西北九州に展開していないことは、北九州の中でもその西半には根強い伝統的な文化が展開していることを示すとともに大陸からの文化の門戸として、一つの優位性を保持していることを示すものであろう。ここに新しく出現した弥生時代における瀬戸内的様相は、その後どのように展開したのであろうか。西北九州の文化圏に力強く侵入出来なかったこの文化は、豊後水道→日向灘への展開をよぎなくされ大きく規制されることで南への道を選ぶことになるのである。このことが土器文化の検討によって裏付けられる。東九州の弥生時代中期から後期への様相がそのことをよく示している。

従来知られている宮崎県下の弥生時代中期の代表的遺跡は延岡市差木野遺跡、高千穂町岩戸遺跡、新富町日置遺跡、宮崎市曽井遺跡などであるが、これら中期中葉の資料は一括して扱うかぎりにおいて、北部九州の須玖式に相当するものであり、弥生式土器でももっとも大型の甕形土器が製作された時期である。このことは、差木野遺跡の土器によっても保証される。この前段階の中期初頭の資料は、しばしば前期末の資料や中期中頃の資料を共伴するか、あるいは混在して出土することの多いことは北部九州の例であきらかであるが、宮崎県下の場合発掘調査によって報告されている例がないだけに本遺跡の資料は、空白を完全に埋めることが出来ないまでも、貴重な資料を提示し得る点で重要である。甕形土器にみられたように断面三角形の突帯をめぐらし、底部がやや開きざみの平底を持つ土器は、表面の研磨においても優美なものがあり須玖式の古いグループに比定することが出来るからである。これに合わせて壺形土器の櫛がき文にみられるように瀬戸内的な様相を考えるとき、大分県下の大津式を標式とする大津式文化圏内で理解されるものであり、東九州の地方性を強く示している点で一つの課題を持つものである。南九州において古く大隅式と呼ばれたもののうちの前半の資料によっても指摘される鹿児島県下の山ノ口式 註9 との関係を強く示しながら、大分県下の大津遺跡や下城遺跡と同じように強く瀬戸内の影響を認めめた点で意義があり、弥生式文化の中での地域性が問題とされるからである。このことは板付Ⅰ式土器によって標式される弥生時代前期初頭において力強く展開し始めた北部九州の新しい文化が、中期に入って急激に瀬戸内の影響を受け入れた地域を出現させたことを意味し、しかも文化的には須玖式以上に大津式や大隅式の拡がりの強さと根強い地域性を示すことで、九州の弥生文化が新しい転期にたっていることを示すものであろう。この時期における墓制の展開や金属器の受容、更に遺跡立地の変遷を考慮に入れれば、転期の意味が強加されよう。

以上のことからも本遺跡出土の鉄製品の意味は大きい。現在までの発掘調査例では宮崎県下最古の資料であるばかりでなく、大陸系石器としての磨製石鏃の出土やかって出土した石戈 註10 を含めて、生産用具の様相に新しい時代を迎えているからである。当初檍遺跡の板付Ⅱ式に伴う鉄製品と考えられた石包丁形鉄器が、すでに確認されたように弥生時代前期の資料でなく、新しい時代の鋤の床金と認定されて以後、いまだに弥生時代中期以前の鉄製品の発掘例がないだけにA地区から出土した鉄器の断片はそれなりに評価されてしかるべきものである。いずれにしろ宮崎県下における弥生時代中期の発掘調査例として、弥生時代前期の檍遺跡の例と同様に土器のセット関係を含めて括りのある様態で知られた類例がなく、此後の宮崎県下における弥生文化の研究に一つの基礎を与えた点で本遺跡の意義は大きい。弥生

時代後期に入ると、若干のと発掘調査が宮崎県下でも行なわれており、都城市の年見川遺跡、佐土原町の下那珂遺跡、高鍋町の農高遺跡、川南町の把言田遺跡、延岡市の貝の畑遺跡などで住居址や方形周溝墓と考の資えられた遺構の検出も含めて、文化内容が前期や中期以上にあきらかになっている。この時期の資料は清武町加納遺跡 註11 や宮崎市赤江遺跡のように戦前から知られている遺跡もあるが他の地域も含めて古くかれ知られている遺跡のほとんどがそうであるように、断片的に遺物のみが扱われただけで遺構を含めた考察が出来ていないことは学史上やむを得ないことであろう。

東九州から南九州を含めて考えても、同様のことが指摘されるが、その中でも大分県下の安国寺 註12 遺跡や円通寺遺跡、小原遺跡、鹿児島県下の山ノ口遺跡や一の宮遺跡は注目される。安国寺遺跡の場合は大規模な発掘調査によって東九州の弥生時代後期の標式遺跡の位置をゆるがないものとしており、高杯形土器や器台に明瞭にみられるように北部九州および近畿、瀬戸内文化の両要素を示す資料としてつとに知られている。円通寺遺跡の資料はそれに先行するものであり、小原遺跡の例は、この両者をつなぐものである。鹿児島県下の山ノ口遺跡によって知られる土器群は極めて南九州的であり、その拡がりも鹿児島県下を中心に宮崎県下の大淀川流域までにみられそれ以北にまでは延びていない。一の宮式はこの山ノ口式に後続するものであるが類例に乏しく此後に問題を残している。この時期の資料で宮崎県下より発見されている例は、大分県の円通寺遺跡に対比されるものが都農町の境ケ谷遺跡の資料であり、同じく安国寺遺跡に対比されるものが、川南町の垂門遺跡の資料である。ともに発掘調査がいまだにおこなわれていないため、文化内容の全般が明らかでないが、大量に採集された土器には見るべきものがある。この時期の資料は一般的な表現を使えば、弥生時代中期の須玖式にみられたように全九州的に斉一性をもってみられた北部九州に系譜のある土器文化が、いちじるしく分布圏がせばめられていることである。このことは同時に地域差を持った土器様式の成立を意味するものであり、宮崎県下の南西部や熊本県人吉市、免田町を中心としてみられる重弧文土器の一群においてもまた、さきに触れた鹿児島県下の一の宮式にもよく示されている。

以上のことから本遺跡の宮崎県下における編年上の位置は、中期の前半を示すが、時期的には北部九州の須玖式の時期を考えるべきであり、山ノ口式との関係から若干後行する可能性もあると考える。ここで宮崎県下における弥生時代の遺跡を編年して表にまとめると次の通りになる。

表1　宮崎県下における弥生時代遺跡の編年

時　期	遺　跡　名
前　期	檍遺跡、紙屋遺跡
中　期	石神遺跡、差木野遺跡、岩戸遺跡、日置遺跡、浮ノ城遺跡、元村遺跡、曾井遺跡
後　期	境ケ谷遺跡、把言田遺跡、垂門遺跡、下那珂遺跡、加納遺跡、赤江遺跡、津和田遺跡、大町遺跡、本郷南方遺跡、島山遺跡、春ノ山遺跡、年見川遺跡、東方遺跡

注、以上の遺跡の他、多数の遺跡があるが、ここでは代表的なものにとどめた。

註5　森貞次郎「宮崎県檍遺跡」日本考古学協会編日本農耕文化の生成東京堂所収、昭和35年
註6　森貞次郎「弥生文化の発展と地域性」—九州—、日本の考古学弥生時代所収河出書房、昭和41年
註7　樋本亀生「金海会峴里貝塚発見の甕棺に就いて」考古学911、昭和13年

註 8　賀 川 光 夫・佐 藤　暁　「東九州弥生式中期土器の一形式」別府大学紀要、昭和30年
註 9　河 口 貞 徳　「山の口遺跡」鹿児島県文化財報告第7、昭和36年
註 10　鈴 木 重 治　「宮崎市石神遺跡出土の弥生期の資料」博物館々報第7号宮崎県立博物館、昭和36年
註 11　小 林 行 雄・杉 原 荘 介　編「弥生式土器集成」本編Ⅰ、東京堂、昭和39年
註 12　鏡 山　猛・賀 川 光 夫・乙 益 重 隆　ほか「大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査」九州文化綜合研究所、昭和33年

第 二 節　遺物、遺構を通じての2、3の問題

今回の調査を通じて出土した遺物には、A、B両地区からの土器、石器、土製品、石製品、鉄製品のほか、C地区より出土した時期不明の炭化植物があり、遺構には甕棺墓と壺棺墓、竪穴住居址の一部と溝状遺構がある。それぞれに若干の考察を必要としている。遺物についてみるとき、土器については前節で述べたところがあるので、ここでは石器以下の資料を通じて触れてみよう。出土の石器のうち量的に多いのは磨製石鏃と砥石であり、軽石製模造品と敲石がそれらにつづき、小型磨製の片刃石斧は1点の出土をみただけであった。また本調査以前に附近より出土した石戈も重要な資料といえよう。量的に多い磨製石鏃は、すべて扁平な点に斉一性があり、凝灰岩質の頁岩の剝片を素材とした資料であって、短鋒と長鋒の資料があるが、茎を持つ資料は無く、ともに鎬を明瞭に認めるものが多い。短鋒と長鋒の両形態は、平面観では二等辺三角形及び柳葉形を呈するもので、特異な形態を持っものは無い。これらの磨製石鏃は、一般に磨製石剣と共に宗教的な用具として扱われており、大陸系石器のうちに含まれる。註13 磨製石鏃のうちには、南朝鮮の墳墓中に副葬品として知られているものがあるが、本遺跡では副葬状態での確認は無かった。宮崎県下での類例の発掘資料は、西都市寺原遺跡の弥生時代後期の例があるが、註14 他の旧来知られている資料のすべては表面採集の資料であって問題は残るが、これらも含めて、その素材が凝灰岩質の頁岩を使用している点で共通している。これは製作が容易ということだけでなく、研磨することで金属器に近い性質を示すことに意義を持っものである。磨製石鏃自体は縄文時代にもみられるものであるが、弥生時代の資料は鎬を持つ点で大きく異り、金属器の形態を摸してしている点は注目される。ここに関連する本遺跡の出土遺物は、かつて出土した石戈であり、鋒が切断されて石斧の刃部状を示す資料である。註15 類例は福岡県下の隈遺跡や遠く群馬県の富岡例、新潟県の大潟例によって代表される。ともに金属器の出現がみられた時期の資料であり、縄文時代からの伝統の上にある石器とは全く異質のものである。このことは、A地区出土のヤリガンナを含めて、すでに本遺跡の時期になると宮崎県下においても金属器が普及し始めたことを意味するものであり、多量の砥石の出土もこれを保証している。

軽石製小型摸造品についてみると、従来宮崎県下では知られていないものであって、別項で述べられ図示されているように、形態的には多様であり、厚みのある台形状の資料などは、六面のすべてが研磨されていて中央部に一孔が穿たれていることから垂飾品とも考えられるが、素材が軽石であるところから、形態的に変化に富んだ資料も含めて、利器として利用し得ないものであり、ある種の器物を摸造した資料として、祭祀関係の資料とみるのが妥当であろう。B地区より出土した土製勾玉と共に、供献資料や副葬品を考えてもよいのかもしれない。このようにしてみると本遺跡の性格の一部が示唆されることになり、砂丘の頂部に近く埋葬地が選ばれ、低湿地である砂丘後背地の主要生産地と考えられた地帯

に寄って住居地域が拡がることを予想させている。また数少い石製利器のち敲石や扁平片刃の磨製石斧は、主要な生産活動が農耕生活に依存し始めたと云え、生産用具のうちの鉄器の占める位置がいまだに弱いことを示すものであり、特に扁平片刃の小型磨製石斧が工具としての用途を示すものであってみれば、利器のうちでも石器のはたす役割の大きいことを物語ることになろう。一方C地区における生産地、特に水田地の確認はこれをみなかったが、泥砂中より葦などの炭化植物や原形態の不明な小木片の出土があり、期待し得る状態を認めたことは、課題の一つとして留保されるべきものであろう。

遺構については、甕形土器や壺形土器を棺として使用した墓地がまず問題となる。従来宮崎市内で知られた弥生時代の墓地は、前期の檍遺跡の甕棺と石蓋土壙から成る例、後期の垂水の土壙墓、下北方の甕棺墓、本郷南方の甕棺墓があり、本遺跡から空白の中期の例が確認された点は意義が大きい。この時期の甕棺が成人を埋葬し得る規模の大型の甕が使用されることはさきに触れた通りであり、将来副葬品に良好な資料を得て考察が深められようが、砂丘上の遺跡だけに人骨の出土にも期待されるところがある。また壺棺にみられた底部穿孔は、宮崎においても他の地域と同様に普遍的な慣習として受け入れられたことを示している。なお宮崎市内の市街化の現状を見るときにも、将来に予想される弥生時代の墓地の発見は、大淀川の左岸、右岸を通じて砂丘地帯に期待されるものがある。一方B地区より検出された竪穴と溝状遺構は、その全体像を明確にし得なかったが、竪穴については隅丸方形をプランとするものとみられ、溝状遺構については、住居に附随するものであって、北部九州などにみられる環濠集落の溝や住居地域と墓域を区画する規模の大きな溝とは異質のものである。これらの遺構については不明な点が多く、此後に問題を残すところがある。全体を通じて中期に属することは土器によって明白であり、宮崎県下の弥生文化の展開を検討する際の資料価値は大きい。

以上のことを通じて、弥生文化に入って急激に導入された大陸系文化ではあっても、東九州や南九州においては、弥生後期の終末まで確実に残る利器としての石器をみても、その展開はきわめて緩慢であったものと考えられる。

註 13　有 光 教 一　「朝鮮磨製石剣の研究」京都大学文学部考古学叢書2、昭和34年
註 14　小 田 富士雄　「九州の扁平磨製石鏃」九州考古学16、昭和37年
註 15　石 川 恒太郎　「宮崎市阿波岐原砂丘遺跡」考古学雑誌43—4、昭和33年

(1) A 地点発掘状況

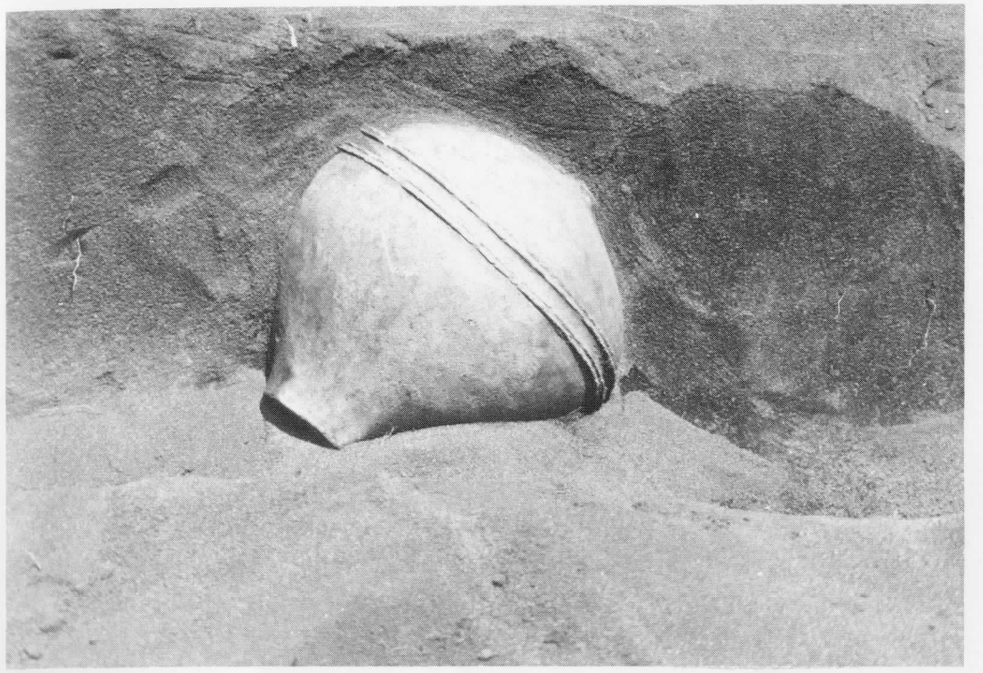
(2) B 地点発掘状況

(1) 遺 跡 遠 景

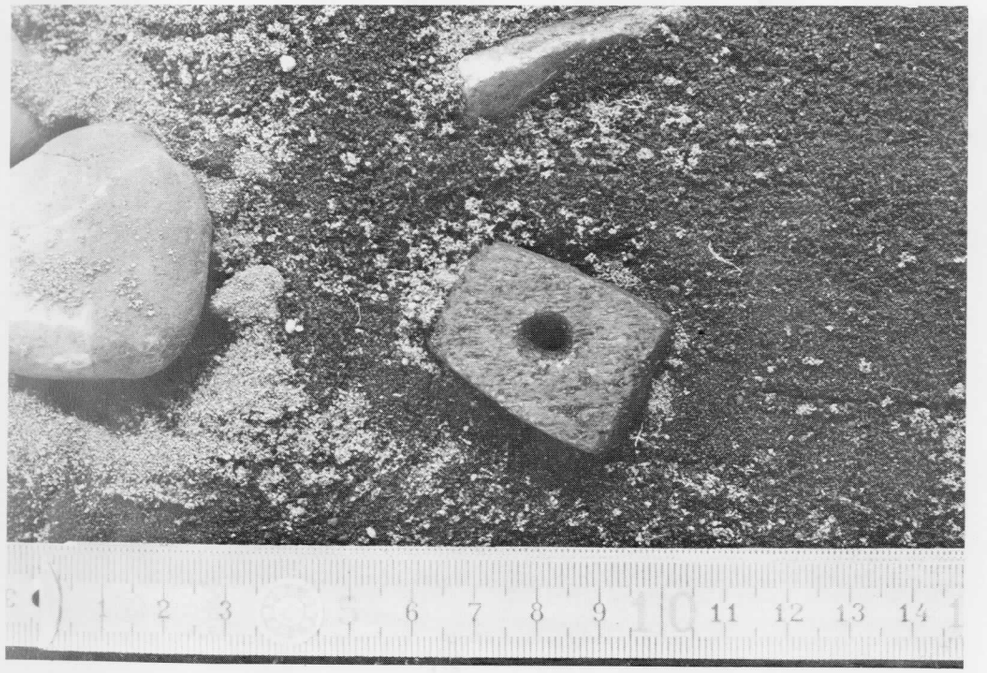
(2) 堆 積 状 況

(1) B地点壺棺周辺の出土状況

(2) 遺物の出土状況

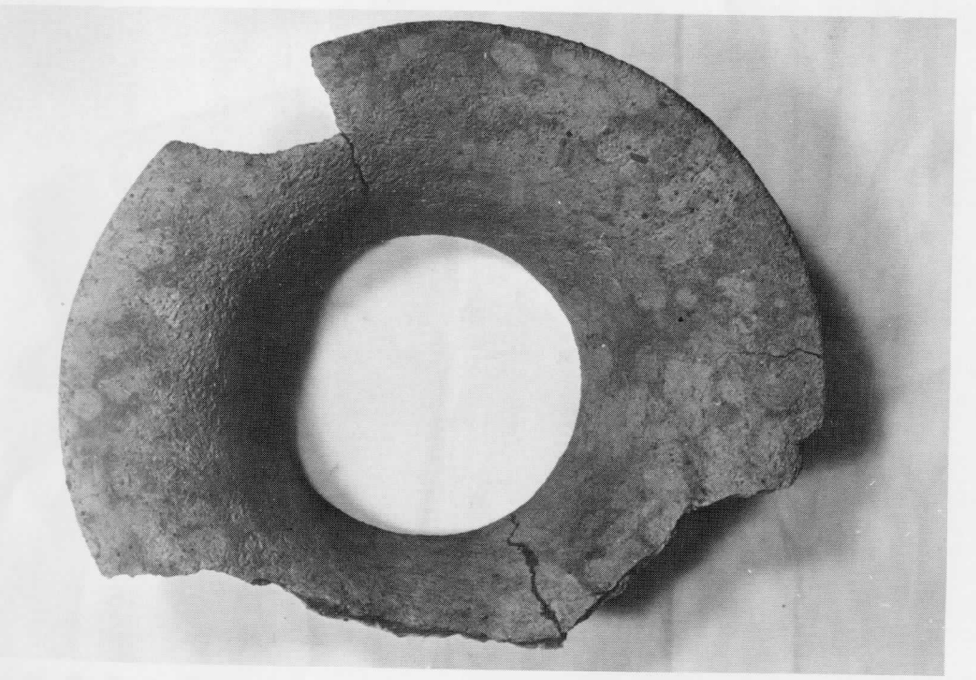


(1) 壺棺出土状況



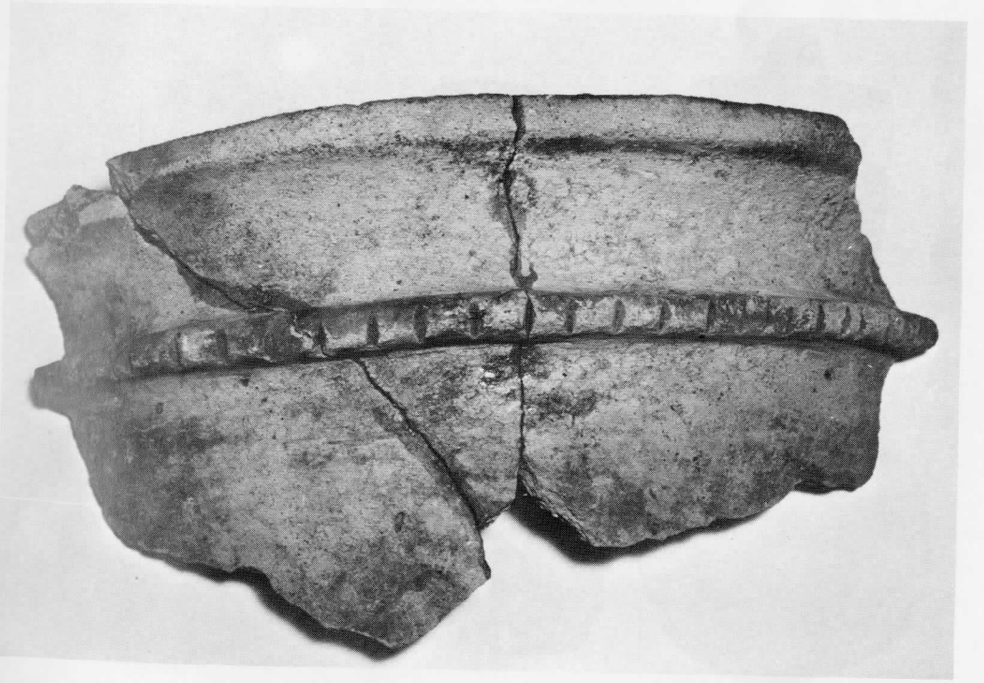
(2) 軽石製品出土状況

(1) 壺 形 土 器



(2) 壺 形 土 器

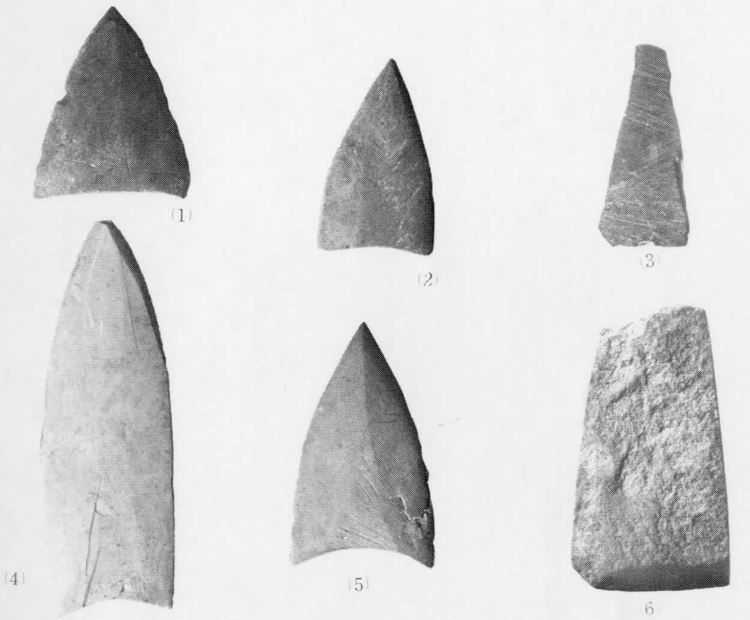
(1) 甕 形 土 器



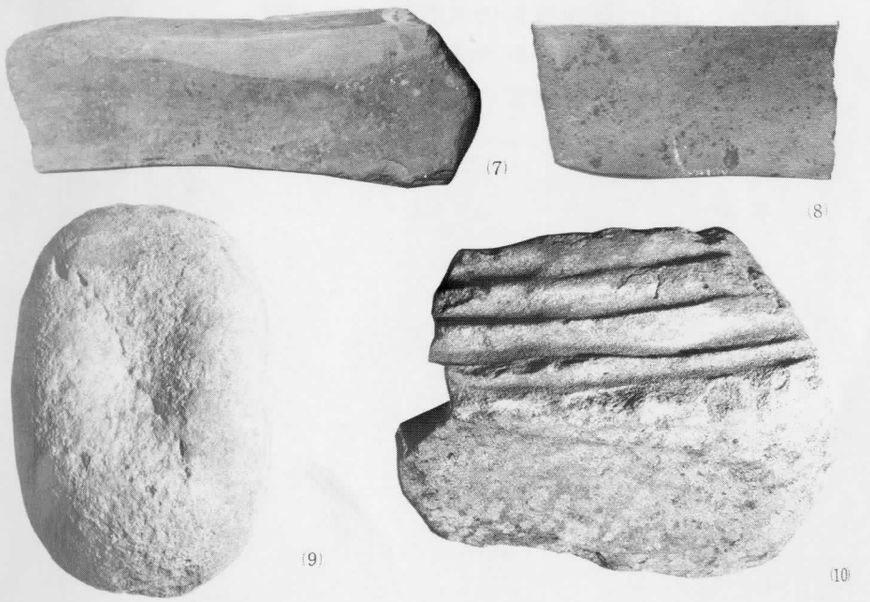
(2) 甕 形 土 器

(1) 壺　棺

(2) 土製勾玉　(3)、(4)、(5)、(6) 軽石製品　(7) 紡錘車



(1)、(2)、(4)、(5) 石鏃　(3)、(6) 小型ノミ型石器



(7) 中型砥石　(8) 小型砥石　(9) 凹石　(10) 大型砥石

石神遺跡発掘調査報告書

昭和48年3月31日　発　行

編集・発行　宮崎市教育委員会
印　　刷　赤沢印刷株式会社
宮崎市大工町142

宮崎市埋蔵文化財センター・遊古館